例言

本書は中學校及びこれと同等學校の教科書として編したれば、專ら事蹟の大綱のみを記せり。

大綱のみを記すは、當に教科書の性質として然るべきのみならず、能く他の教科との權衡を保持し、十分の時間を以て之を授け了らざるべからず、これまた紙數の少きを要する所以なり。本書は最この點に留意し、毎週二時間、一學年に配して、適合せしめむことを期せり。

その細目に至りては文部省の既に定められたるあり。本書は一に之に據れり。

時代の區分は歴史科全體より觀察して、既に學びし國史と、他日學ぶべき西洋史とを照らしたり、特に甚しき懸隔なからしめ、普通行はるゝ古代・中世・近世の稱を用ゐたり。

東洋諸國の興亡舉げ來れば實に少からざれども、支那史を以てその中心とすべきは世の定説なり。故に本書もまた比較上支那史以外を簡にせり。

人名地名を多く擧ぐれば、事蹟の概括に便ならず、隨て之を記憶し難し。故に本書はその極めて著きもののみを擧げたり。

年代はすべて西暦を用ゐず、皆我が紀元によれり。これその觀念を明確ならしめむには、未學ばざる西洋史の紀年を措きて、既に學びたりし國史に對照するの至當なるを信ずればなり。

年表は或時期を終る毎に、生徒をして作らしむるを良とす。されば本書は之を附せず。

明治三十三年三月

編者識

東洋小史目次

第一編　古代史

一　太古の支那　唐虞三代……一
二　春秋の世……五
三　周の制度文物　孔子……九
四　戰國……十一
五　周末の學術……十四
六　太古の印度……十六
七　佛教の興起……十八
八　秦の一統　楚漢の爭……二十
九　漢の初世　高祖の創業　呂氏の亂　文景の治……二十五
十　漢武帝　宣帝の業　四夷の服屬

十一　王氏の簒……二十九
十二　後漢の政　西域の叛服……三十五
十三　匈奴鮮卑の盛衰……三十七
十四　三國……三十九
十五　晉　五胡十六國……四十二
　　東方諸國（朝鮮　三韓　夫餘　高句麗　百濟　新羅）の
　　古史……四十八
十六　大月氏及印度　佛教の東流……五十
十七　宋　齊　梁　魏……五十二
十八　陳　北齊　周　隋　柔然
　　突厥……五十五

第二編　中世史

十九　唐初の治　武韋の禍……五十八
二十　開元の治　安史の亂……六十
二十一　藩鎮宦官の禍　唐末の大亂……六十二
二十二　東方諸國（高句麗　百濟　新羅　渤海）の盛衰……六十五
二十三　西北諸國（突厥　回紇　吐蕃等）の盛衰
　　波斯大食の廢興……六十八
二十四　漢唐の儒學……七十一
二十五　文藝……七十三
二十六　佛教　道教……七十五
二十七　祆教景教の東流　南海の貿易……七十七
二十八　五代　宋の初世　太祖の創業　宋
　　遼の關係　仁宗の治……八十
二十九　神宗の新法　哲宗の改復　徽

三十　宗の紹述……八十四
三十一　遼金の廢興……八十七
三十二　宋金の交渉……八十八
三十三　宋代の儒學文藝……九十一
三十四　宋代の高麗……九十二
大食國の分裂　印度に於ける
回教國　西遼の建國……九十四
三十五　蒙古の勃興　元太祖の西征……九十六
三十六　元太宗の南略　拔都の西征……九十八
三十七　元憲宗の南征　旭烈兀の西征……百
三十八　元世祖の一統及東侵……百二
三十九　海都の興亡　元代の治亂　欽
察・察合臺・伊兒汗・三國の盛衰……百四

第三編　近世史

四十　明の初世　太祖の創業　成祖の遠略　靖難の役……百七
四十一　帖木兒大王の兼併……百九
四十二　明の中世　土木の變　俺答の寇　大禮の議……百十二
四十三　交趾の叛服　沿海の寇盜……百十四
四十四　明の末世　萬曆朝鮮の役　流賊の獄　東林……百十六
四十五　莫臥兒帝國の興亡……百十九
四十六　葡萄牙西班牙の東略　天主教
の東流……百二十一
四十七　清の開國　世祖の一統……百二十四
四十八　清聖祖・高宗の業……百二十六
四十九　清人の學術……百三十

東洋小史目次 終

五十　東洋に於ける和蘭英佛諸國の競爭……一三二
五十一　英領印度……一三四
五十二　清英の交渉……一三六
五十三　長髮賊の亂　英佛の北清侵伐……一三七
五十四　露人の東略・清露の關係……一三九
五十五　安南　暹羅……一四二
五十六　清佛の交渉……一四四
五十七　清韓の關係　日清の交戰……一四六

新編東洋小史

高橋健自編

第一編　古代史

太古の支那　唐虞三代

支那太古の事蹟は詳ならざれども、傳ふる所によりて考ふれば、今を距ること五千年、漢種族は當時支那に蕃息せる苗族を驅逐して、西北より漸次東南に移り、黃河沿岸を中心として、その文化を開きしものゝ如し。

この頃多くの部落各地に散在して未統一せるものなかりしが、燧人氏は火食を敎へ、伏羲氏は八卦を畫し、漁佃を敎へ、神農氏は耕稼の道を敎へ、交易の制を創め、また醫藥の術を開きたりとぞ。世この三氏を稱して三皇といひ

漢種の東下

三皇

以てその德を頌せり。

黃帝に及びて能く四方を征定し、統一の大業を成就し、こゝに廣大なる版圖をひらけり。帝につぎて顓頊・帝嚳・帝堯・帝舜出づ、世に之を五帝と稱す。然れども此の三皇五帝の稱異說頗多し。

五帝

帝堯は帝嚳の子なり。仁德聖明にして能く天下を治め、義和に命じて曆法を定め、舜を畎畝の間にあげて國政を委ね、遂に位を禪りき。帝舜これなり。

帝舜

舜は顓頊六世の孫なり。孝悌を以てその名夙に著る。後政を執るに及び、連年洪水を治して功なかりし鯀を刑し、その子禹をしてこれに代らしめ、苗族を江南に退けてその版圖を擴め、中央に九官を置き、地方に十二牧を置き、またよく諸種の禮樂法度を定めたるなど、その政蹟後世を

して瞻仰せしむるものいと多かりき。史上堯舜の治世を唐虞の代と稱す。

夏の興亡

舜崩じて禹位に卽きぬ。亦顓頊の裔なり。禹の子を啓といふ、賢にして民心を得たり。是に於て堯舜禪讓の風一變して世襲の端を開き、遂に父につぎて王位にのぼりしが、後その孫相に至りて、王室の威振はず、諸侯に簒立せるものさへありき。されど數十年の後、相の遺孤少康出でゝまた能く祖業を興したりき。夏の最後の王を履癸といふ、また桀王と稱す。無道にして酒色に耽り、遂に商の湯王に滅されたり。禹よりこゝに至るまで實に十七世四百餘年なり。

殷の興亡

湯王は舜の時司徒たりし契の後なり。名相伊尹をあげて大にその德を明にし、桀王を滅して王位に卽き、國號を

周の興亡

商といひき。後殷と改めたり。相傳ふること三十世六百餘年、帝辛卽ち紂王に至り、暴虐無道にして諸侯反くもの多く、終に周の武王に滅されぬ。

武王は堯舜の代、后稷たりし棄の後にして、西伯昌の子なり。位に卽くに及び、大に宗室功臣を封じ、また紂の子武庚をして殷の後を嗣がしめ、殷の王族箕子を朝鮮に封じき。武王崩じて子成王立つ。尙幼冲なりしかば、叔父周公旦政を攝して之を佐く。この間海內安寧にして、文物また頗進歩せり。されど數世を經て周室漸く衰へ、厲王の時に及びては諸侯命を奉ぜず、遂に國人に逐はれ、十餘年の久しきが間、王位空しきことさへありき。その子宣王一たび祖業を恢復しかども、子幽王に至りては暴橫にして酒色に耽弱し、王后太子を廢し、遂に后の父申侯に殺されたり。かくて申侯太子を擁立せり。平王これなり。當時周室大に衰へ、諸侯の勢頗る盛んに、西戎の來侵さへありければ、王その鋒をさけて洛邑に遷りき。武王の卽位よりこゝに至るまで十二世三百五十餘年、是を周の東遷といへり。史上夏殷周を三代と稱す。

十二强國

二　春秋の世

古へ三皇五帝の世、族長を群后といひ、萬國と稱したりしが、漸く兼併して、周の初に至りては千八百の諸侯となり、周の東遷後は諸侯各、其の雄を競ひて、大なるもの僅かに十二、相割據するの時となりぬ。この時代を春秋の世と稱す。十二强國中周と同姓なるは、魯・衞・晉・鄭・曹・蔡・燕の七侯にして、異性なるは、齊・宋・陳・楚・秦の五侯なり。當時周室既に

五霸

自立の力だになかりしかば、こゝに霸者といへるもの起り諸侯を糾合してこれが盟主となり、天子を挾みて國内に號令したりき。所謂五霸これなり。五霸とは齊桓公・宋襄公・晉文公・秦穆公・楚莊王をいへり。吳の闔廬・越の句踐の如きも亦霸者と稱するを得べし。

齊桓公

齊桓公沈毅にして大略あり、内周室を安んじ、外夷狄を退け、管仲を登用して政績頗見るべきありしが、管仲の死後、嬖臣漸く權を專にし、寵姫六人その出皆繼嗣を爭ふに至り、勢また昔日の如くならず、公もまた尋て卒しぬ。

宋襄公

桓公につぎて霸たりしは宋襄公なり。襄公もと桓公と親し。かつてその囑を受け、齊の公子昭を立てたりしが、後楚と泓に戰ひて敗績し、徒に宋襄の仁と笑はるに至りき。

晉文公

かくて楚の勢日に加はり、諸侯能く之に抗するものなく、いまや殆ど中原を併呑せむとす。時に晉文公出でゝ之を制し、遂に之を城濮に破れり。公少うして驪姫の難にあひ、他境に流寓し、具に辛酸を嘗めたりしが、秦穆公の力に依り歸國して世を嗣ぎ、城濮の役後その名益著はれ、永く霸權を中原に握ることを得たり。

秦穆公

當時秦穆公また西方に雄視せり。公と、晉文公とはさきにいひし關係あれば、情交自ら親しかりしが、文公卒してその子襄公立つに及び、兩國こゝに隙を生ぜり。穆公百里奚等の名臣を登げ、意を内治に留め、また兵を用ゐて多く地を略し、連に晉と戰へり。

楚莊王

既にして南方より出でゝ霸業を成したるを楚莊王といふ。王は城濮に敗れし成王の孫なり。當時晉の國勢稍振はざるを察し、之れと兵を構へ、益威を逞くしたりしが、數

吳王闔廬

越王勾踐

世を經て吳軍に破られ、復振はずなりぬ。

楚の莊王の死後、その子共王立てり。時に吳に壽夢といへるものあり、晉と結びて楚を夾擊し、漸くその地を得たり。壽夢の後四傳して闔廬に至り、楚の亡臣伍員を用ゐ、その謀によりて楚の國都を陷れたり。

その頃越王に勾踐といへるあり、かつてその父が闔廬に破られたるを恨み、遂に吳軍を破りて闔廬を殺しき。闔廬の子、夫差越軍を破り、勾踐を會稽山に降し、以て父の仇を復せしが、後勾踐その臣范蠡と吳を伐ち、夫差を殺して之を滅せり。

時に周元王位にあり。東遷後十五世、年を經ることすでに三百年、王室益傾き、諸侯の滅亡せるもの百五十國の多きに及びき。これより後を戰國の世といへり。

三　周の制度文物　孔子

封建制度

周公の畫策

支那太古の世、封建の制未だ完からず、群后といへりしも實は族長に過ぎざりしが、三代に至り帝王世襲の制漸く定まるにつれて、益發達し、周公攝政の時に及びて、その制始て完備の域に入りぬ。周公の聰明なる、よく夏殷の遺制を改善し、海内諸侯の爵を五等に分ち、その國を三等に分てり。公と侯とはその國方一百里、之れを大國とし、伯は七十里、中國とし、子と男とは五十里、小國とす。而して五十里以下の小諸侯に至りては之を附庸と稱し、諸侯に屬せしめたり。

官制

周の政令能く行はれたるは、蓋しその直轄なる王畿の地に過ぎざりしなるべけれど、其の官制等頗覩るべきも

のあり、後世概之に則りぬ。これまた周公の畫策せるところにして、六官といへり。天官は政務を總理し、地官は教育を掌り、春官は祭祀朝儀を掌り、夏官は兵馬を掌り、秋官は刑法を掌り、冬官は産業を掌れる是れなり。

兵制

兵制は一萬二千五百人を一軍となし、天子は六軍を領し、諸侯は大國三軍、中國二軍、小國一軍を領するの定めなりき。

學問

舜の時、契司徒となり教育を督せし以來、三代各學校の設あり、六藝を課して子弟を教養したりき。春秋の世に至りて周制弛廢し、思想の束縛を脱してこゝに言論の自由を得るに及び、人智の活動文運の進歩頓に著し。是時に當り先づ孔子出でゝ先王の道を唱へ、大に人倫を正し、又よく古典の意を明かにして諸制を詳かにし、以て支那歴朝

政教の基礎を確立せり。

孔子

孔子その名を丘といふ。周の靈王二十一年を以て魯國に生る。當時周室のいたく衰替せるを慨き、身を以て之を匡濟せむと欲し、その道を行はむとて、四方に奔走し、その席暖なるに遑あらず、時に或は陳蔡の野に餓死せむとせしことさへあり、辛勞夥多にして功少かりしぞ口惜しき。是に於て諸弟子と共に專ら古典を講じ、詩書禮樂を匡し、終に春秋をものせしが、尋て七十三歳にて卒せり。その弟子の多かりしこと三千人に達し、中にも身六藝に通ずるもの七十餘人ありきとぞ。

四　戰國

戰國の世

春秋の末葉に當り、周室既に傾き、覇者また尊王の義を

三晉

齊の田氏

戰國七雄

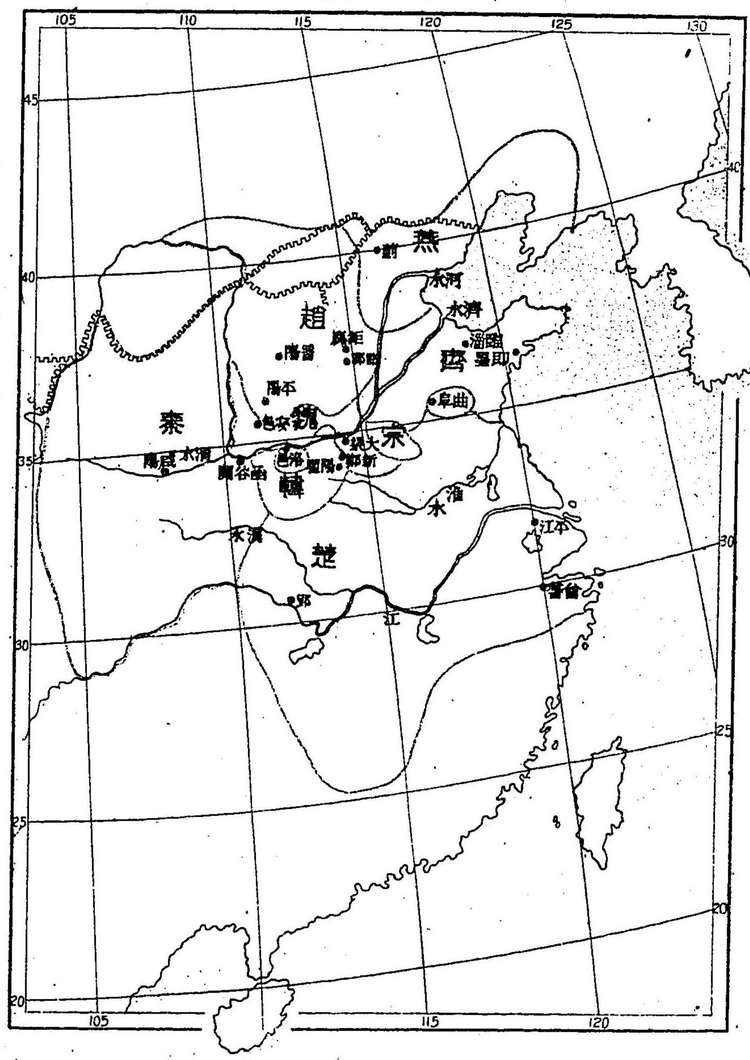
秦孝公と公孫鞅

唱へず、天下亂麻の如く、道義蕩然地を拂へり。是に於てか陪臣の權漸く熾に、其君を弑してその土を奪ふに至りぬ。晉の六卿・齊の田氏の如き卽ち是れなり。

晉の六卿中、當初最勢力ありしは知伯なりしが、後趙・韓・魏の三氏相謀り、知氏を滅してその地を分ち、終に周に請うて諸侯に列せられたり。之を三晉と稱す。當時齊に田氏あり、また尋て齊に簒立して列侯となりぬ。かくて强は益、弱を併せ、諸侯の社稷を有せるもの僅に十餘國、而して獨立の實力あるは、この三晉と田齊氏との他に、燕・楚・秦の三國に過ぎざりけり。戰國の七雄これなり。彼の宋・衞・鄭・魯の如きはあれども無きが如く、辛うじて殘喘を保てるのみ。

秦は穆公以來世〻西域に覇なりしが、十六世の後、孝公に至り、奮勵政を修め、こゝに强國の策を講ぜむと欲し、天

戰國圖



下に令して、賓客群臣よくこれが奇計を出すものを求めき。時に衞の公孫鞅といふもの、來歸して覇道を說きしに、公悅びて之を容れ、國威頓に暢り、六國競々としてその侵略を蒙らざらむことをのみ希へり。

孝公につぎて立ちしは惠文王なり。時に周人蘇秦來りて王に說くところありしが、用ゐられざりければ、去りて六國對秦の形勢に應じ、合從の策をたて、先づ燕に說き、趙に及び、終に地四國に遊說して、攻守同盟を定め、己れ六國の相印を帶びたり。かくて秦もさすがに恐れたりけむ、公孫衍をして齊魏を欺きて趙を伐たしむるに及び、從約全く破れたり。

惠文王の時、魏人張儀といふあり、もと蘇秦と共に鬼谷子の門にいづ。惠文王に說くに連衡策を以てし、先づ魏を

合從

連衡

服し、尋て楚懷王を欺きて秦に親ましめ、漸く六國をして秦に從はしめたり。既にしてこの約もまた遂に破れ、海内紛擾益甚しく中にも燕・齊の如きはその兵結んで解けず。會、趙の如き廉頗・藺相如の輩ありといへども、秦愈その富强を增し、昭襄王立つに及んでは、魏人范雎が遠交近攻の策を用ゐ、連年兵を東に出し、遂に周室を亡せり。武王の即位よりこゝに至るまで八百六十七年、實に我紀元四百五年なり。この後三傳して政の時に至り、悉く諸侯を滅して海内を統一せり。政は即ち秦始皇帝なり。

周の滅亡

五　周末の學術

儒家と道家

支那文運の發達は、漢種族が漸次北方より南方に移れるに伴ひしが、周制の衰頽するに及んでは、その思想の傾向自ら同一ならず、孔子北方魯に出でゝ先王の道を稱し、老子南方楚に起りて無爲の說を唱へき。孔子のこと既にいへり。老子名は耳、世老聃と稱す、その著老子道德經いまなほ存す。かくて儒家道家の學こゝに始まりしが、この兩者の承繼者に孟子・莊子いで、周末の學界に異常の光彩を放ちき。

孔子と老子

孟子と莊子

孟子名は軻、鄒人なり、學を孔子の孫子思の門に受け、諸侯の間に周遊し、儒道を以て天下を治めむと欲せしが、終に容れられず、その徒と孟子七篇を述ぶ。その說くところ孔子の如く圓滿の境に入らずといへども、雄辨達文なる實に孔子の承繼者たるに耻ぢざるなり。莊子名は周、宋人なり。孟子と時を同うし、老子の說を祖述し、無爲自然を旨とし、莊子を著す。その文遒健自恣、また學者の稱するこ

諸子

ろなり。其の他孟子の後に荀況あり、莊子の前に列禦寇あり、甲は儒を唱へ、乙は老子を宗とせり。

儒道兩家の他に法家といふあり、管仲を祖とす。而して申不害術を說き、公孫鞅法を說き、韓非法術を合せて之を說き、李斯之れによりて秦の大業を成就せしめき。その他諸子の主要なるものをあぐれば、墨翟は兼愛說を唱へ、楊朱は自愛說を稱し、孫武と吳起とは兵學を傳へ、公孫龍の徒は詭辯を能くし、蘇秦と張儀とは縱橫家の名を成せり。これらは皆周末の學術界に雄飛せるもの、後世諸學の源泉多くこゝに發するを見る。人智發達の著き實に漢史中この時期を最とす。

六　太古の印度

亞利安種の南下

ブラマバルタ朝階級制度

ハステナバル朝

アイオデア朝羅摩大王

支那の文化を開きしは、外より入り來りし漢種族なるが如く、印度の文化を創めしも亦外來種族なりき。今をさること四千年前、亞利安人種の中部亞細亞より南下して印度に入るあり、まづ「パンヂャップ」地方をさだめ、恒河の邊に繁殖せし土人を統一したりき。後「バラタ」王出づるに及び、こゝに一大王國を建て、國號を「ブラマバルタ」と稱しき。

當時人智頗進み、文化の度大に見るべきあり。人民に四種の階級制度ありき。婆羅門・刹利・吠舍・首陀羅是なり。

「バラタ」王の後に「サンタヌ」王といふあり。都を「ハステナバル」に奠め、能く國內を統治したりしが、其崩後國勢漸く弛み、「アイオデア」國之に代れり。「アイオデア」當時の王を羅摩といふ。賢明にして四境を征服し、大に版圖を擴張し、その裔久しく統治の大權を握れり。

七　佛教の興起

婆羅門族は、祭祀を掌りて諸族の上位にありしを以て、漸く權勢を專にし、他族を抑壓すること甚しかりき。是に於て刹利族のものまづ起ちて抵抗を試み、盛んにその腐敗奸曲を責めて止まず、「アイオデア」朝の末年に至りては、婆羅門の根柢に動搖を來しぬ。時しも刹利族より釋迦牟尼出で、こゝに創めて佛教を唱へ、階級制度に一大打擊を加へたり。

釋迦

釋迦はその名を悉達といふ。迦比羅城の淨飯王の子なり。夙に人生の無常を觀じ、遂に出家して道を求めむと志し、父母に離れ、妻子に別れ、四方に遊びて苦行を嘗め、こゝに婆羅門に反對して、一宗教を開き、一切衆生平等の說を

摩利耶朝
阿育王

主張せり。釋迦の誕生は我紀元百四年頃にして、その入滅は百八十三年の頃なり。

釋迦在生の頃と其死後百數十年間とは、佛教の勢力未だ全く印度に普及せざりしが、摩揭陀國の阿育王の保護を得るに及んで、國教の如くなりぬ。初「アイオデア」朝滅亡後百有餘年間、全國統一の業を成就せるものなく、內紛々として小邦割據し、外波斯の侵略ありて、「インダス」河邊日一日に多事なりしが、希臘の歷山大王奮起りて波斯を滅し、更に東して軍を印度に進むるに及び、摩揭陀國に「チャンドラグプタ」といふあり、その戰亂に乘じて歷山王の將と和を講じ、終に摩利耶朝を起せり。時に我紀元三百四十年の頃なり。當時佛教はこの朝の保護を得、其勢力を擴張せしが、「チャンドラグプタ」の孫阿育王に至りて更に勢を

増したり。王の佛教に歸依するの厚き、いたく布教に留意しその徒を諸外國に派して之を計らせたり。

八　秦の一統　楚漢の爭

秦始皇帝

秦始皇帝その名を政といふ。その秦に王たるや、內には李斯を用ゐて諸國に反間を放ち、以てその手足を斷ち、各相猜疑せしめ、外には王翦父子を擢でゝ兵に將たらしめ、連に六國を侵掠せり。先づ韓を滅し、尋て趙王を虜にし、後魏王を殺し、楚王を捕へ、燕を平げ、齊を服し、こゝに全く六國を併せたり。時に我紀元四百四十年なり。是に於て政自ら始皇帝と稱し、二世三世より以下萬世皇帝と稱するに至らしめむと欲したりき。

郡縣制

帝の支那全土を統一するや、周室が封建の制を定めて、遂に諸侯の爲にその權力の失墜したるを鑑み、是に至りて封建を改めて郡縣の制となし、全國を三十六郡に分ち、守・尉・監の三職を置きて之を治めしむ。又民間の兵器を收めて之を朝廷に致し、諸郡の富豪を移して帝京なる咸陽に住せしめたり。北の方匈奴の侵入を防かんとて、萬里の長城を修築したるも實にこの時なり。

秦の失政

帝の政策かくの如く功を奏して、中央集權の實を擧げたりしが、帝はなほこれに甘んせず、その尊嚴を示して民心を畏服せしめむと欲し、さかんに土木を起して宮殿を營み、頌德の碑をさへ四方に建てしめしかば、戰國の餘風未た全く失せざる當時のことゝて、天下の學者政治を非議するもの漸く多し。是に於て國中に求めて詩書百家の書を燒き、諸生四百六十餘人を坑にせり。その慘酷かくの

如くなりしかば、民また亂を思ふに至りぬ。是時に當り帝出遊して途に崩ず。宦者趙高・丞相李斯と謀り、詔を矯めて小子胡亥を立つ。二世皇帝これなり。而して長子扶蘇と蒙恬とは詔なりとてこの時死を賜ひき。

群雄割據

秦は民心既に離れたり。群雄はこの機に乘じて起てり。楚人陳勝吳廣先づ兵を蘄に起し、武臣・田儋・韓廣・周布等また尋て起てり。時に楚人項梁といふあり、その姪項籍と兵を擧げ、范增を用ゐて謀主となし、其議を容れて楚懷王の孫心を擁立し、祖王の謚を用ゐしむ。こゝにまた沛人劉邦といふあり、その兵勢亦熾なり。是に於て秦帝その將章邯等を遣し、之を平げしむ。章邯等進んで諸軍を破り、終に項梁を殺しき。項籍乃ち梁に代りてその兵を領し、大に秦軍を鉅鹿に破りて章邯を降し、やがて諸侯の上將軍となり

項籍と劉邦

ぬ。

楚懷王嘗て諸將と約すらく、先つ關中を定めたるものは之れに王たらむと、項籍もとより强悍無雙、奮つて關に入らむと欲す。されど豁達にして大度ある劉邦は王の命を受けて先づ秦に向へり。是に於て邦連に秦軍を破り、進んで覇上に至る。是れより先趙高、李斯と隙あり、之を讒殺して己れこれに代りしが、後秦軍連に敗るゝに及び、帝の怒を恐れ、遂に之を弑し、帝の兄の子嬰を立てたり。嬰立つに及んで乃ち高を誅せり。是に至りて邦の軍覇上に達しければ、嬰竟に支ふべからざるを察し、素車白馬出でゝ邦の軍に降りき。始皇帝の統一よりこゝに至るまで僅に十五年、嬰の王たりしこと實に四十餘日に過ぎざりけり。

秦の滅亡

邦既に關中を定め、秦の苛法を廢して法三章を約し、專

鴻門の會

楚漢分爭

ら人心の收攬に意を用ゐしかば、その民靡然として悅服したり。時に藉河北を鎭して西の方秦に入らむとす、會、邦の兵之れを函谷關に拒みき。藉是に於ていたく怒り、直に之れを破りて鴻門に至り、今や將に邦を攻めんとす。蓋し范增が謀りしところ、邦の運命はあはれ危機一髮の間に横はりぬ。この時恰、邦の謀臣張良のあるあり、邦その言をき、馳せて鴻門に至り、藉を見て謝し、僅に事なきを得たり。世この和解の會合を鴻門の會と稱す。

かくて藉はその勢を恃みて恣に約を破り、邦を漢中に封じ、秦の降將章邯等を關中に分封して之に備へ、已れ自ら梁楚の地を領し、西楚の覇王と稱して彭城に居り、遂に人をして懷王を弑せしめたり。當時邦漢中に在り、大に成すところあらむと欲し、蕭何・張良・韓信の三傑を用ゐ、やがて兵を關中に出してその地を略し、進んで洛陽に至りしが藉王を弑せりときゝ、こゝに其の罪を鳴らして諸侯を合せ、長驅彭城を陷れたり。この時藉東征して齊の地にありしが、之をきゝ自ら精兵を率ゐて引還し、大に漢の大軍を睢水の上に破りぬ。これより藉常に邦の軍を破りたれど、その軍孤にして外援なきが上に、范增も遂に去りければ、民漸く離れ、勢また傾きぬ。その垓下に敗るゝに及びては、慷慨悲歌さすがに禁ずること能はず、圍を衝いて烏江に至り、終に自刎して死にけり。

漢の高祖の創業

九　漢の初世

高祖の創業　呂氏の亂　文景の治

楚漢五年の分爭は漢の勝利に歸せり、劉邦乃ち皇帝の位に即きぬ。漢の高祖皇帝これなり。帝即位の初洛陽に都

せしが、後幾程もなく關中に移り、長安を以て都と定めたり。

帝の海内を統ぶるや、長く之を子孫後世に傳へむと欲し、周秦の先蹤を鑑み、郡縣・封建の兩制を合せて別に一制を立て、郡と國とを定め、郡には守を、國には王を置き、要害の地には特にその宗室を封じて藩屏となせり。而して異姓の功臣また王に封ぜらるゝもありしかど、これも帝の欲せざるところ、いかにもしてその領土を收めむと努めしにや、韓信・彭越等の諸功臣皆叛名を以て前後滅されたりき。

帝はかく統一の偉業を遂げたりといへども、北狄に對してはその志を伸ぶること能はざりしなり。當時匈奴勢盛んにして、北邊その侵略を蒙りしかば、帝親征之れを退

匈奴單于冒頓

けむとせしが、却て單于冒頓の爲に白登に圍まれたることさへあり、竟にその來侵を止むること能はずして和を講じき。

當時廷臣多く布衣より起りければ、そのなすところ禮を失へること少からざりき。是に於て帝叔孫通の議を納れてこゝに朝儀を制定せるなど、文事にも頗心を用ゐたり。

呂氏の亂

帝崩じて立ちしは子惠帝にして、皇后呂氏の所生なり。后夙に高祖を助けて功あり、擧朝畏服せざるなし。されどその性悍にして、高祖の寵愛せし如意を鴆し、その母戚夫人を殘殺し、自ら政柄を握りき。惠帝の崩後恣に他人の子を立て、やがて之を殺し、大に呂氏を四方に封じ、今や將に劉氏を壓してその天下を奪はむとするに至りしかど、后

文帝の治

の威を怖れ敢て事を擧ぐるものなかりしが、后崩ずるに及んで、高祖の孫齊王襄先づ兵を擧げ、陳平・周勃等と謀りて諸呂を滅せり。世にこれを呂氏の亂といへり。

呂氏の亂後立ちたるは文帝なり。帝は實に當代の明君にして、在位二十三年の間、仁儉寛厚を以て能く下を率ゐしかば、有司皆質素を尙び、各その職に安んじ、稅歛日に薄うして海內月に靜平なり。されど帝の政を爲す方鍼は寧退守的なりければ、漸く增進せる諸侯の勢力を制して、王室を强うするの策に至りては、竟に果し得ざりき。

景帝の治、七國の亂

帝もと諸侯より入りて帝位に即きたるを以て、その威望未諸侯を壓するに足らざりしが、子景帝立つに及びて、鼂錯の議を納れ、漸く諸侯の地を削れり。是に於て吳王先づ反し、膠西・膠東・菑川・濟南・楚・趙の六國また兵を起して之に應じ、皆鼂錯を誅するを以て名となし、その勢頗熾なり。帝遂に錯を殺し、やがて周亞父をして七國を鎭定せしめたり。これより諸侯の權漸く衰へ、帝室の威はじめて重し。

十　漢武帝　四夷の服屬　王氏の纂

宣帝の業

文景の間、國中家給し人足り、文學の萌芽は將に發せむとするの時となりぬ。その時に當り、儒を好み文を愛する武帝は嗣ぎて帝位に上りしかば、文運の發達著く、その隆盛なる漢代亦比を見ざるに至れり。

武帝

神仙の說

帝神仙の說を好み、屢方士に欺かれて無用の土木を起し、民を役すること少からず。特に當時は國家殷富の後を承けたれば、自ら奢侈に流れたりしが、晩年に及ひていたく悔悟するところありきこそ。

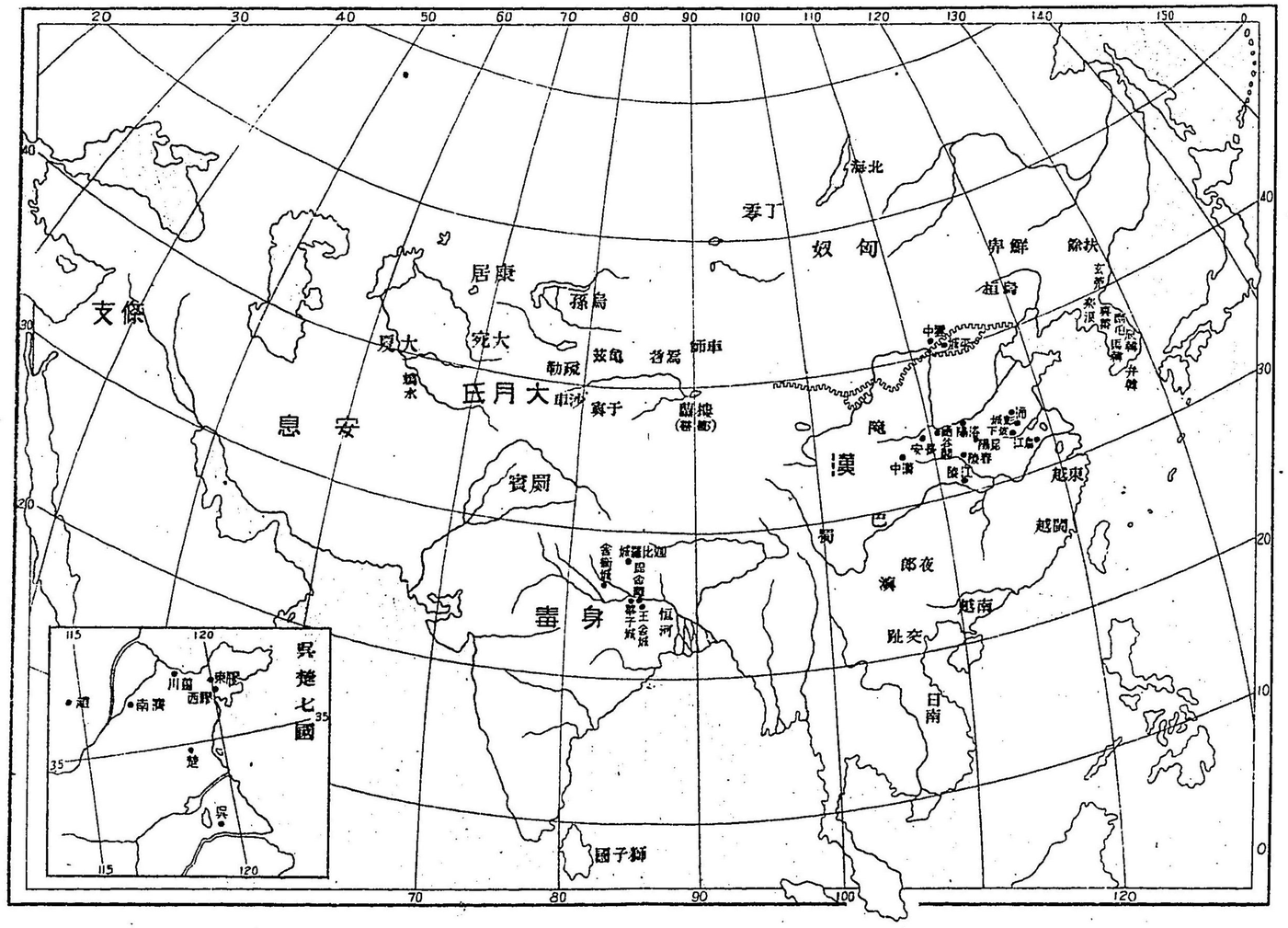
漢代東洋諸國

この頃亞細亞大陸に於て、漢以外に既に國を建てたりしもの少からず。條支國は最西端に位し、安息國その東南に起り、大夏國またその東に起り、大月氏は更に大夏を略して國を建て、身毒即ち印度は罽賓の地を隔てゝ天月氏の南にあり、大月氏の東北に大宛國あり、大宛の北に康居國あり、その東南伊犂地方に烏孫國あり。而してこの東は即ち漢の北に當り、匈奴こゝに國して勢最熾なり。また漢の西南には夜郎・滇等の國あり朝鮮も亦未だ服屬せざりき。

武帝の外征

亞細亞大陸の形勢かくの如きの時に當り、漢は常に匈奴の侵略をうけてその輕侮するところたりしが、武帝の時に至りては、國漸く富み兵また漸く強きを加へたれば、こゝに積年の恥辱を雪ぎて匈奴に報ゆる所あらむと欲

漢代東洋諸國圖


北海
丁零
匈奴
鮮卑
扶餘
高句麗
烏桓
玄菟
樂浪
帶方
倭
高麗
沃沮
濊貊
中國
遼東
遼西
右北平
渤海
安平
廣陽
上谷
漁陽
涿郡
城陽
下邳
江都
廣陵
中山
陵江
隴
冀
越東
越嶲
巴
蜀
郎夜
濱
越南
牂牁
日南
國子獅
身毒
月氏
大月氏
烏孫
康居
大宛
大夏
烏弋
安息
罽賓
龜茲
莎車
于闐
疏勒
車師
焉耆
敦煌
姑墨
疏勒
莎車
于闐
罽賓
烏弋
安息
月氏
大夏
大宛
康居
烏孫
龜茲
焉耆
車師

し、まづ張騫を大月氏に遣し、相共に匈奴を擊たむと計りき。されど大月氏は竟に應ぜざりき。この間帝、衞青・霍去病等をして相踵ぎて匈奴を討たしめ、また唐蒙をして南征せしめ、益、その領土を擴めたり。朝鮮北部の漢に屬せしもこの時にありき。

かくて漢の武威は能く四境を壓せしが、己にして武帝崩じ、その子昭帝立てり。帝なほ幼なりければ、大司馬霍光先帝の遺詔を以て攝政す。光の政をなすや、常に民の疾苦をとひ、稅歛を薄うし、治績頗る見べかりき。

昭帝在位十餘年にして崩ず。光乃ち武帝の孫賀を迎立せしが、その淫逸度なきを見之を廢し、更に武帝の曾孫宣帝を立てたり。帝幼にして巫蠱の難に遇ひ、民間にありて親しく辛酸を嘗めたりしかば、自ら民情に通じて政務に

霍光の攝政

宣帝

明かなりき是を以て帝の代は人材大に輩出し、良吏いと多かりき。稱して前漢中興の明主といふもまた偶然にあらざるなり。帝卽位の初、霍光政を還さむことを請へり。然れども光の帝に於ける、既に策立の功さへありければ、帝の謙讓なる敢て之を受けず、諸事光をして關白せしめ、光卒するに及びて始て政を親らにしたりき。

匈奴服屬

是より先漢威益域外に揚り、匈奴の勢漸く孤なりしが、宣帝烏孫を援けて、大に匈奴を破りしより、從來匈奴に服屬せし烏桓丁零等、並起りてその弊に乘ぜしかば、匈奴の勢日一日に衰へたり。加之內訌交起り、國中分裂して遂に二國となり、呼韓邪郅支兩單于相戰ひしが、呼韓邪敗れて漢に降りぬ。この後數年元帝の時に至りて、郅支は漢兵のために康居に殺され、呼韓邪は漢の宮人を娶りて世親族

宦者の專橫

國と稱したり。

宣帝崩じて立ちしは子元帝なり。帝優柔多病なるを以て、政權は一に宦者の掌理に歸し、石顯等樞機を執りて大に威福を張れり。是に於て宣帝中興の業もいたく衰へたりしが、子成帝立つに及びて、石顯等の黨悉く黜けられき。されども漢室の害毒は更に發して甚しきものありき。帝の母后は王氏なり、太后の弟王鳳入りて政を執るに及び、外戚は宦官に代りて權を弄することゝなりぬ。

王氏の簒

かくて王氏の族に王莽といふあり、累進して大司馬となる。彼れ恭儉を裝ひ、士に禮し、賢を尊び、陽に君子の風を示して、大に勢望を博せしが、成帝崩じて元帝の孫哀帝立つに至り、一たびは職を辭して返居したれど、平帝の時に及びて再び入りて政を統べ、宰衡の號を有して諸侯の上

王莽の敗亡

に立てり。既にして莽帝を毒殺し、宣帝の玄孫嬰を立て、己れ自ら假皇帝と稱し、後幾程もなく帝位を簒奪し、國號を改めて新と稱しき。漢は高祖よりこゝに至るまで十三世二百十年にして亡びぬ。時に我が紀元六百六十八年なり。

莽已に簒立を遂げたりといへども、その政をなすや、固より權謀のみ、賦歛漸く重く、法令愈苛を加へたり。是に於てか四海囂然、遠近兵を擧ぐるもの多かりけり。こゝに漢の宗室に劉演・劉秀の兄弟あり、兵を春陵に擧げ、劉玄を帝となし、諸軍を統一し、莽を討ちて之を破り、終に長安に入りて之を殺しき。秀はかくて四方の賊を平げ、諸將に推されて帝位に卽けり。世祖光武皇帝卽ちこれなり。これより都を洛陽に遷し、かば、世に之れを東漢また後漢といへり。王莽の帝號を稱せるは實に十五年に過ぎざりき。

光武帝の治績

外戚宦官の專權

十一　後漢の政　西域の叛服

光武帝の海内を統一するや、まづ莽の苛政を除き、親ら大政を綜理し、また兵事を口にすることなく、大に文學を興し、禮樂を修め、處士周黨・嚴光等を厚遇して盛に高節の士を擧げ、諸功臣を封じてその終りを全からしめたり。これより章帝に至る六十餘年の間、四海太平の春にあへりしは、實に帝德の然らしむるところなり。

光武帝の崩後、明帝を經て章帝立てり。帝大に竇后を寵せしより、外戚の權漸く強く、帝崩じて和帝立つに及び、太后の兄竇憲等、逆謀を企てしが、帝宦者鄭衆と謀りて竇氏を退けたり。是れより宦官の勢熾んにして外戚と權を爭ひ、交、害毒を流しゝかば、政綱弛廢し、漢室の威振はず、遂に

桓帝の時に至りては、天下の權全く宦者の掌裡に移りぬ。是に於て朝野の名士世の汚濁を慨せるもの、李膺・陳蕃等力を協て宦者に抗せしが、惜むべし却て讒に遭ひ、李膺等二百餘人獄に繫がる。世にこれを黨人の獄といへり。されど李膺等の名聲益〻高く、帝崩じて靈帝立つに及び、再び朝に列し天下太平を想望せしが、幾くもなくまた宦者の誣言に遇ひ、蕃膺等殺されたり、これより海内亂れて群盜四方に起りき。

黨人の獄

西域の叛服

匈奴は前漢の代已に内屬したりしが、王莽簒奪を逐ぐるに及びて、漸く北邊を侵せり。光武帝國内を定めたりといへども、專ら文治に意を用ゐ、努めて國外に事なからむことを圖りしかば、西域自ら漢に遠ざかり、匈奴これを威服して勢方に熾んなり。明帝の時にいたりて班超といへるものなり。西域に使して、先づ鄯善を降し、更に于寘・疏勒の二國を定めつ。この時に當り耿秉等また匈奴を破り、國威大に揚れり。かくて明帝の崩後漢また意を西域に絶ちたりしが、班超自ら起ちて征西を請ひ、遂に龜茲・焉者を破るに及びて、漢の武威域外に轟き、西域五十餘國悉く内屬ぜり。超またその將を太秦に遣し、こゝに歐亞交通の端緒を開けり。漢の外國を壓せる勢實にかくの如くなりきといへども、超の卒せる後は邊境再事多く、遂に西域を服することこと能はざりき。

十二　匈奴鮮卑の盛衰

前漢の代一旦服屬せし匈奴は、王莽の簒立するに及びてまた叛きしこと既に述ぶるが如し。然るにその後匈奴

匈奴南北に分る

匈奴の瓦解

の地凶歳連りに打ち續きて、頗る疲弊したりしが、烏桓この機に乘じて匈奴を破りき。是に於て匈奴また漠北に移りぬ。かくて光武帝の時に至りて、呼韓邪の孫日逐王比といへるが、匈奴の南邊八部を師ゐて南單于となり、漢廷に歸して恭順を表せり。これより匈奴南北に分れて互に兵を用ゐしが、遂には北單于も和を漢に求め、漢もまた之れを許し、南北匈奴相和せざらしむるの政策をとれり。この時に當り耿秉の匈奴征伐あり、北匈奴をしていたく衰へしめたり。これより北匈奴の勢頓に傾き、鮮卑その東を侵し、丁零その北に寇し、南匈奴その南を伐ち、西域諸國その西を斷ちしかば、國步益、艱難を極めたり。既にして和帝の時に至り、漢また之れを討ち、之れをして遠く鄉地を去り、殆ど滅亡の運に達せしめたり。

鮮卑烏桓の勃興

匈奴去るに及んで、その地を略して移住したるものを鮮卑となす。鮮卑はもと烏桓と同種族なり。秦漢の際稍強大なりしが、冒頓單于に壓服せられ、其衆東に奔りてその餘命を保ちしなり。こゝに至りて二者共に好運に遭遇し、鮮卑は匈奴の故地を得、烏桓は上谷より遼東の地を保てり。中にも鮮卑はその勢頗熾んに、桓帝の頃に至りては大に領土を伸長して北方に一大國を形つくりぬ。

十三　三國

章帝以來外戚宦官交、權を弄し、漢室漸く傾きしが、靈帝の時に至りて盜賊蜂起し、海内紛擾の端を發けり。この時にあたり張角といふものあり、妖術を以て愚民を誑惑し、その黨を聚めしが、其の衆數十萬の多きに達し、相率ゐて

黄巾の賊

劫掠を事とせり。これを黄巾の賊といふ。漢廷皇甫嵩をして伐ちて之を平げしむ。されど群盗の勢なほ猖獗なり。

袁紹と董卓

靈帝崩じて子辨立てり。袁紹外戚何進と謀り、勇將を四方に徵して跳梁せる宦者を誅せむとせしが、謀泄れ何進宦者に殺さる。袁紹乃ち起つて宦者を誅せり。時しも董卓徵に應じて洛陽に入り、帝辨を廢して献帝を立てたり。卓の入洛するや、紹之れと爭ひ、出でゝ東に奔り、諸將に檄して卓を伐つの軍を擧げしめ、己れこれが盟主たり。已にして卓殺され、帝許に遷りて曹操に迎へられき。

曹操はさきに皇甫嵩と共に黄巾の賊を討ちて功ありしもの、今や帝を挾みて勢大に加はり。遂に袁術を滅して袁紹を破りつ。かくて紹は憤死し、操の勢益加はり、劉備を追擊して南に向へり。劉備は漢景帝の裔なり、襄陽に諸葛亮を得て大に之を任用せしが、こゝに至りて江東に赴き、孫權に說きて操の軍を拒がしむ。權この議を諾し、大に操の軍を赤壁に破れり。是に於て三國鼎立の基礎始めて成りぬ。

赤壁の戰

三國鼎立

この後、備は巴蜀の地を取り、更に漢中を定め、權は江南をも併せて吳の地を統べたり。已にして操死し子丕嗣ぐに及び、獻帝に迫りて位を己に禪らしめ、國を魏と稱す。文帝これなり。光武帝の復興より是に至るまで十三世一百九十六年、時に我が紀元八百八十年なり。かくて備も帝位に卽けり。是れを蜀の昭烈皇帝といふ。尋で孫權も亦帝位に上りぬ。吳の太祖皇帝これなり。是に至りて海内全く三分せられたり。

蜀の昭烈帝崩じて後主禪立てり。亮遺詔を受けて之を

輔け、屢、出でゝ兵を魏と交へしが、遂にその意を果さず、空しく軍中に卒しき。時に魏に司馬懿といふものあり、頗る權勢を揮ひ、その子師・昭相つぎて相國となりぬ。この間蜀は日に益、萎縮せしが、遂に昭に滅されたり。昭の子を炎といふ。父祖歴世の功を負ひ、終に魏の元帝に迫りて位を禪らしめ、國號を晉と改めき。晉世祖武帝卽ちこれなり。

蜀の滅亡

晉、魏に代る

吳の滅亡

晉の武帝この後幾くもなくまた吳をも滅せり。吳は太祖帝以來數傳して帝皓の時に至り、その行修らず、國政大に傾ぶきければ、遂に晉軍に破られ國祀こゝに絶えにき。晉是に於て全土を統一することを得たり。實に我が紀元九百四十年なり。

十四　晉　五胡十六國

晉の武帝すでに統一の業を遂げたりといへども、後漸く倦怠の念生じ、內宴樂を事とし、外兵備を怠りしかば、晉室の根柢に動搖を來し、他日變亂の前兆方に現はれぬ。武帝につぎて立てるを惠帝といふ。當時外戚楊駿政を專にしたりしが、汝南王亮之を殺して己政に參りぬ。されど皇后賈氏この間にありて專事を用ゐしより、この後楚王瑋・趙王倫・齊王冏・成都王穎・河間王顒・長沙王乂・東海王越互に起りて權を爭ひ、骨肉相賊するの活劇を演せり。世にこれを八王の亂とはいふなり。これより晉室大に衰へ全く藩屏の力を失へり。

八王の亂

この時に當り清談といふこと朝野の間に行はれ、虛無を談じ、放逸を喜び、禮義を放擲して恣に天下を嘲り去り、以て大に快となすの風あり。竹林の七賢の如きその最著

清談の流行

れたるもの。是に於てか國家の士氣蕩然として地を拂ひ、その跡だに見るべきなし。

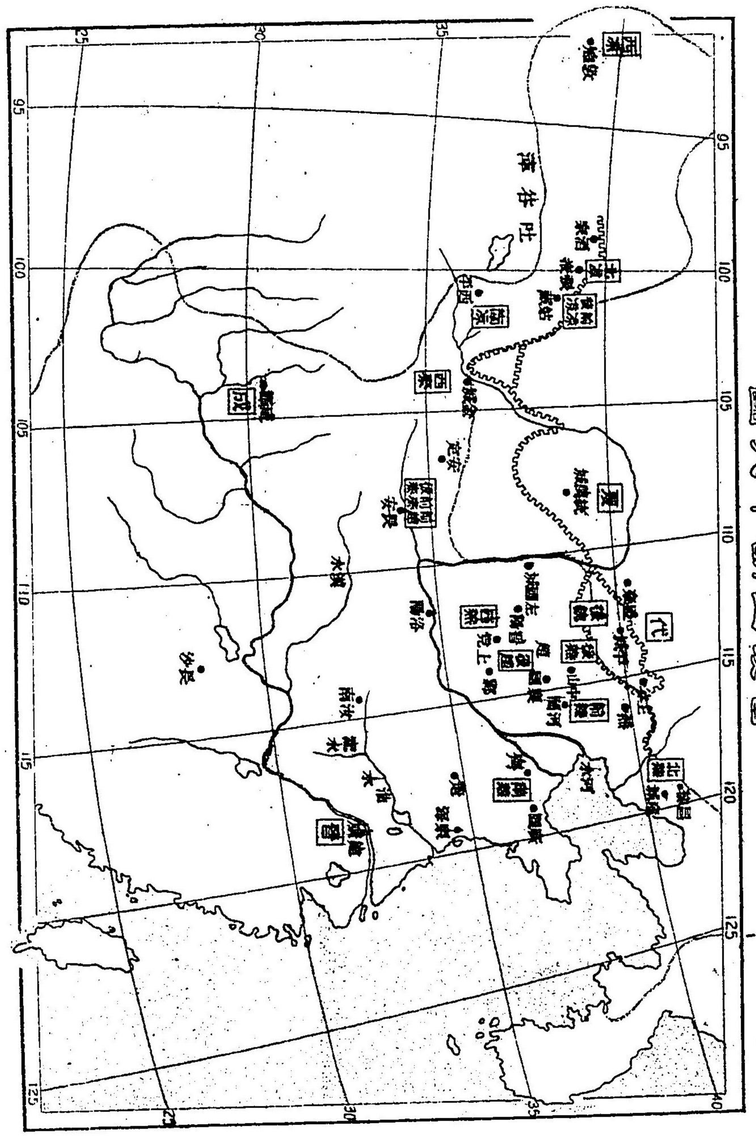
晉室の衰頽かくの如きの時、氐種に李雄といふものあり、先代の經營を承け、その餘勢に乘じて蜀を略し、帝と稱して國を成と號せり。こゝにまた劉淵といふあり、呼韓邪單于の後なり、この時勢に乘じて故業を復し、連に兵を晉に加へたりしが、こゝに至りて帝を稱し、國號を漢といへり。

成

漢

劉淵の子劉聰また材武あり、父の後を承け、その族劉曜及び部將石勒をして晉都を陷れしめ、懷帝をはじめ晉の宗族を擒にせり。懷帝は惠帝の弟なり。時に愍帝長安に即位し、僅に晉の社稷を保ちしかど、幾程もなく落城して曜の軍に降りぬ。

西晉の滅亡



圖ハ十朝五夷畫

前趙、後趙

東晉

かくて劉聰晉を滅したれども、其死後國分裂して二となり、劉曜その一を領して趙王と稱し、石勒他を領してまた趙王と稱しき。史上前者を前趙と呼び、後者を後趙といふ。已にして勒曜を破りてその地を併せつ。

愍帝の敗亡するや、司馬懿の曾孫に琅琊王睿といへるあり。建業に即位して江東に據りぬ。これを中宗元皇帝といふ。史上この以前を西晉といひ、以後を東晉といふなり。帝中原恢復に焦慮したれども、權臣反旗を擧ぐるものさへあり。憂憤病を成して崩じき。この後明帝成帝の間、內亂相踵ぎて起り、志を中原に伸ぶること能はず。康帝を經て穆帝に至り、桓溫出でゝ軍を掌り、蜀に攻入りて李漢を滅せり。李漢ははじめ成と稱し、李雄の建てしところなるが、中ごろ國號を改めて漢といひしものなり。

前秦
前涼
前燕

この時に當り後趙の石勒既に死し、內亂の餘、部將冉閔、石氏を滅し自立して魏帝と稱しぬ。時に符洪といふもの秦王と稱し、張重華もまた涼王と稱せり。史上之れを前秦・前涼といふ。かくて中原復分裂せしが、鮮卑の慕容儁、魏を滅して鄴に移り、こゝに帝と稱しき。これを前燕といふ。後儁死し子暐立つに及び、大に桓溫を破りて其鋭を挫けり。時に前秦の王に符堅といへるあり、符洪の孫なり。その臣王猛を用ゐて遂に前燕を滅し、又前涼を降し、更に鮮卑の柘跋氏の地を略し、大にその版圖を擴めければ、是に於て意滿ち心驕り、大軍を率ゐて南の方晉を伐てり。晉の謝安孝武帝に勸めてこれを防がしめ、大に之れを淝水に破りき。

淝水の戰

淝水の戰の後幾もなく符堅殺され、前秦また四分五裂

後燕・西燕・後秦・西秦・南涼・後涼・北涼・西涼・後魏・南燕・大夏・北燕

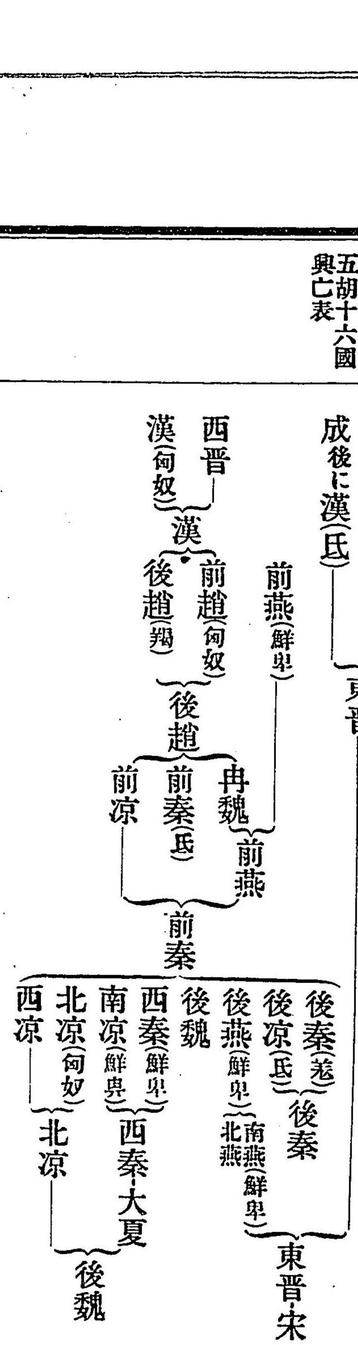
東晉の滅亡

し、後燕・西燕・後秦・西秦・南涼・後涼・北涼・西涼・後魏・南燕・大夏・北燕交、起りしが、遂に北方の牛耳を執りしは後魏の道武帝なりき。後魏この後再傳して太武帝に至り、全く北方を統一せり。

東晉は淝水の戰後國內稍無事なりといへども、武帝につぎて子安帝立つに及んで、桓溫の子桓玄兵を擧げて簒立せり。されど劉裕出でゝ玄を殺し、帝を弑して皇弟なる恭帝を立て、やがてこれをして己に位を彈らしめたり。宋の武帝即ちこれなり晉は西晉の初より百五十六年茲に至りて亡びぬ。時に我が紀元一千八十年（四二〇）（繼體天皇十四年）なり。

以上述べ來りし五、種の胡夷、その國を建つるもの十有六、一起一仆して遂に宋・後魏の兩國となりし次第、左に表を以てこれを示さむ。

五胡十六國興亡表



朝鮮の建國

箕氏

十五　東方諸國　朝鮮　高句麗　三韓　百濟　夫餘　新羅　の古史

朝鮮の建國は已に周代以前にありしなるべく、開祖檀君に就きて傳說あり。されど文獻の徵すべきは箕子以後なりとす。箕子は殷の王族なり。周武王の殷を滅すや、これ

衛氏

三韓

漢の四郡

三國鼎立

を朝鮮に封じぬ。當時朝鮮といへるは全半嶋の名稱にあらず、大同江より遼河に至るの地方なりき。この後凡そ九百餘年、漢の初に燕人衛滿といふものあり、朝鮮を襲うてこれを取り、箕子の裔箕準を追へり。準是に於て半嶋の南部韓の地に入り、馬韓一部の王となりぬ。

この頃半嶋南部國を建てりしもの三あり馬韓・辰韓・辨韓これなり。中に就きて馬韓最優勢なりき。

衛滿一たび朝鮮に王たりしかど、その孫右渠に至り漢の武帝に滅されたり。而して漢この地を分ちて玄菟・樂浪・眞番・臨屯の四郡となせり。是れより先、玄菟郡の北即ち長白山北に國を建てたりしものあり、夫餘といふ。こゝに朱蒙といふものあり、その部屬を率ゐて沸流水の上に高句麗國を建つ。已にして朱蒙の子溫祚、國を去りて更に南の

方馬韓に入り、こゝに百濟國を建てたり。當時百濟の東に新羅國あり、その建國は少しく高句麗の以前にして、赫居世これが始祖たり。かくて半島は三國鼎立の形勢となりければ、漢の政令の半島北部に及びしも實にしばしなりけり。若しそれこの三國の消長に至りては後文に之れを述べむ。

大月氏國の隆盛

迦膩色迦王

十六　大月氏及印度　佛教の東流

大月氏が大夏國を滅してその地を略せしは、吾等が既に學べりしところなり。この後大月氏の版圖漸く膨張して、中央亞細亞は更なり、印度北部を領し、遂に安息の地をも併するに至りぬ。已にして、迦膩色迦王に至りて、厚く佛教を保護し、その隆興を計りしかば、こゝに佛教の一大根

佛教南北に分る

佛教の東流

據地を形成せり。

是れより先、佛教は阿育王の扶助を得て頗る隆盛を極めたりしが、摩利耶朝亡びて、「サンガ」、「アンドラ」兩朝の間、一盛一衰あり、遂に一たび力を失ひたる婆羅門教、漸くその氣焔を高め來りたれど、錫蘭地方はさきに阿育王の子摩哂陀（シダ）の熱心なる布教ありし以來、また佛教の一根據地たりき。是に於て佛教は南北二部に分れ、一は大月氏國王の保護を得て北の方中央亞細亞に傳播し、一は南の方後印度地方に流布せり。

大月氏の迦膩色迦王の頃は後漢の初代にして、漢室の稜威將に西域に洽からむとす。會、明帝位にあり、頗る意をこゝに用ゐたり。是に方て帝蔡愔（ケイアン）を大月氏に遣しゝに、愔佛像・經典を得、迦葉摩騰・竺法蘭の二僧を伴ひて歸朝せし

かば、帝ために洛陽に白馬寺を建てゝ布教に從事せしめたり。これより佛教漸く支那に行はれ、外國僧の來るもの多く、三國より晉に至りて益〻隆盛に赴きぬ。

迦膩色迦王の後、大月氏は漸次衰微せしが、遂に南印度の「アンドラ」朝に代りし「クプタ」朝のためにその印度領を失ふに至り、剩さへ當時勃興せる波斯（ペルシヤ）國の侵略を蒙りければ、大月氏は終に土崩瓦解の悲境に沉めり。波斯人はもと安息に屈服したるもの、是に至り之を滅して西部亞細亞に雄視せしなり。已にして嚈噠（エフタル）の北方に興るあり、大月氏の故地を定め、尋て印度に入り、「クプタ」朝を服し、また波斯をも破りて和を請はしめ、一時大にその威を振へり。

波斯

嚈噠

十七　宋・齊・梁・魏

南北朝

宋の興亡

齊の興亡

宋南を統べ、魏北を領してより、隋の一統に至るまで、その間百七十年これを南北朝と稱す。宋は武帝の崩後國內稍平かなりしが、遂に魏と隙を構へ、却てその侵略をうけしより、政綱弛み、內訌相踵ぎ、廢立弑簒の餘、權臣蕭道成は自立せり。齊の高帝これなり。

當時魏に君臨せるは孝文帝なり。齊の高帝の崩後その內訌に乘じて兵を南に加へしかど、志を得ざりき。已にして齊の疎族に蕭衍といふものあり、帝寶卷を建康に圍む、城中帝を弑して降れるあり。皇弟和帝立つ。幾程もなく衍その彈を受けたり。梁の武帝即ち是れなり。

この頃魏は國政擾亂、舉朝柔弱、帝幼なるを以て太后胡氏政を執る。されどその淫虐なる、固より爲政の器にあらず、遂に帝を殺しゝかば、紛擾忽起り、廢立屢〻行はる。而して

魏東西に分る

高歡この機に乘じて起ち、孝武帝を立てゝおのれ權柄を握りしかば、帝これを忌み洛陽を出でゝ長安に入り、宇文泰に身を寄せたり。歡乃ち更に孝靜帝を立てけり。これより魏は東西に分れ、連に兵を交へき。

梁の興亡

北朝はかく亂れたれど、南朝はいと平穩なり。時に梁の武帝帝位にあり、深く佛に歸依してその流布を助けき。かくて武備漸く廢れしが、こゝに侯景といふものあり、反旗を飄して都城を圍む。城中の民皆久しく太平夢裡に眠れるもの、今やその震駭いはむかたなし。城終に陷り、帝景と和を結びき。是れより梁室傾き、後侯景の自立を見るに至りぬ。されど陳霸先兵を擧ぐるに及び、景はその下に殺され、霸先遂に南朝に簒立せり。

陳、北齊、後周の盛衰

十八　陳、北齊、周、隋　柔然突厥

陳霸先梁に簒立す、これを陳高祖武帝といふ。是れより先、高歡の子高洋また東魏に簒立せり。北齊の文宣帝これなり。已にして宇文泰の子宇文覺もまた西魏に簒立す。後周の孝愍帝これなり。是に於て北朝は齊周相對することゝはなりぬ。陳武帝の卽位はこの時にありしなり。かくて齊は國步日に艱難なりしが、周は武帝に至りて親ら政事に精勵し、國勢頗る見るべきものあり、帝乃ち齊の衰ふるに乘じて之を滅し、こゝに北朝を合一せり。

隋の一統

周この後、靜帝の時に至り、外戚楊堅政を執り、勢朝を傾けしが、遂に周の禪を受けて立てり、これを隋高祖文帝といふ。この時に當り、陳の後主叔寶、遊惰に耽り敢て意を政

隋煬帝

事に留めず、賄賂公行して民苛歛に泣けり。文帝この形勢を察し、陳を伐ちて之れを滅せり。晋以來紛興亡未だ歸するところなかりし漢土、是に至りて隋の統一となりぬ。

隋の文帝の意を政事に盡すや、民漸く安堵せしが、次子廣、强悍にして智略あり、遂に父文帝を弑し、また兄勇を殺して自立せり、煬帝これなり。煬帝位に卽くや、放恣淫逸、驕侈度なく、盛に宮室を營み、所々に運河を穿てるなど、財用多端にして民大に苦みき。加之、帝外征の師を起し、南は林邑を定め、西は吐谷渾を服し、東は琉球を平げたり。我が朝小野妹子を遣して、信を通じたるも實にこの時なりけり。然るに高句麗いまだ入朝せざりければ、帝大軍を發してこれを征すること前後二回、何れも敗績せり。是に於て海内復亂れ、群雄其鋭を競ふの時となりぬ。時に李淵突厥を

隋の滅亡

柔然

突厥

防きて外にありしが、その子世民の勸に從ひ、突厥の兵を借りて長安を取り、煬帝の孫恭帝の禪を受けて、帝位に卽きぬ、唐の皇祖高帝卽ちこれなり。時に我紀元千二百七十八年（推古天皇二十六年）なりき。

唐高祖のこゝに至りしは、突厥の援を得たるにあり。故に以下突厥從來の歷史を講ぜざるべからず。東晋の初代に當り、匈奴の別種漠邊に國を建てしものあり、柔然と稱しき。その主大檀可汗の時、魏の太武帝に破られ、國勢いたく衰へたりしが、醜奴可汗に至り、兩魏分裂に乘じて大にその領土を伸長し、弟頭兵可汗に及びて全盛を極めたり、

この時に當り、突厥は柔然の部屬より興り、その主伊列可汗故ありて柔然を恨み、頭兵可汗を擊ちて之を殺しき。これより柔然頓に衰へ、幾くもなくして亡びぬ。是れ正に

梁の末葉に當れり。かくて突厥の國運大に張り、連に四隣を服せしが、後東西兩國に分れて互に相攻伐せり。而して隋末に至りては、東突厥の勢甚熾んに、唐の高祖を援けて隋に代らしむるに至りき。

第二篇　中世史

十九　唐初の治　武韋の禍

貞觀の治

唐の高祖が統一の偉業を遂げたるは、世民の力によること多かりしなり。されば世民の兄建成、弟元吉と謀りて、之れを殺さむとせしが、却て世民に殺されたり。かくて世民は父につぎて位に卽きぬ、是を太宗皇帝といふ。太宗天資聰明、才文武を兼ぬ。兵亂鎭定に歸するの後、專ら文德を以て天下に臨みき。是に於て房玄齡・杜如晦等內に登用せられたりしが、外に對するもまた李世勣・李靖等の兵を督するあり、國勢四隣に轟けり。當時海內靜平、文敎大に興り、制度典章の備れる實に後世の模範たり。史上これを貞觀の治といへり。

則天武后

太宗につぎて子高宗立てり。この頃前朝の餘威なほ存したれど、太宗の才人武氏、一旦佛に歸したるが、再髮を畜て後宮に入るに及び、政權全くその手に落ちたり。已にして高宗崩じて子中宗立ちたれども、武氏之れを廢して、自ら制を稱し、國を周と號しぬ。史に則天武后といふ是れなり。武后素行修らず、剩さへ權謀多かりしかど、その特に統御の才に長けたればにや、名相もその下に安じたりとぞ。晩年に至りて、張柬之、兵力を以て遂に武族を除き、中宗を位を復せしめたり。

韋氏の禍

中宗再祚するや、妃韋氏を立てゝ皇后となす。韋氏は帝の謫居の間、具に艱難を同うせるもの、故を以て今や常に朝に臨みて政に參せしが、后もまた內行修らず、その淫事の露れむことを恐れて、帝を弑しき。時に唐の宗族に隆基といふあり、兵を擧げて后を斬り、其黨を誅して父旦を立つ、睿宗皇帝これなり。

二十　開元の治

開元の治

睿宗卽位の後、幾もなく位を子隆基に傳ふ。是れを玄宗皇帝といふ。帝の卽位するや、意を政に專にし、姚崇・宋璟また能く輔弼の任を盡しゝかば、國內太平、百姓殷富なり。世開元の治と稱し以て貞觀の治に比す。

安祿山

然るに帝の晩年に至りては、李林甫相となり、弊政こゝに發し、楊太眞帝の寵遇を得て、禍機全く熟し、遂に安史の亂は起りぬ。安祿山はもと胡人なり、性狡黠、阿諛を以て帝の信任を博し、身節度使の重任を帶び、勢熾なりしが、遂に反旗を擧げて洛陽を陷れ、僭稱して大燕皇帝といへり。顏

顔眞卿・顔杲卿・郭子儀・李光弼

史思明

眞卿・顔杲卿、勤王の師を起して克たず、郭子儀・李光弼出でゝ官軍稍振へり。されど賊軍勢なほ盛にして關中に入り、長安を攻落しき。帝出でゝ蜀に逃れ、太子命を受け留まりて位に卽きぬ。是れを肅宗皇帝といへり。

祿山の子に慶緒といへるあり、後父を弑して自立せり。已にして賊將史思明、之を殺して、その位を奪ひたりしが、これもまたその子朝義に殺せられたり。この間子儀・光弼等力を王事に盡せりといへども、賊未だ平定せず、肅宗崩じて子代宗立つに及び、朝義その下に殺され、亂始めて鎭まりぬ。

二十一　藩鎭宦官の禍　唐末の大亂

藩鎭の勢力

唐廷の兵革を厭ふや、安史の亂後諸降將をして、河北の地に節度使たらしむ。これよりこの地の諸鎭相結びて朝命に抗せり。節度使はもと胡夷を防がむがため置かれたるものにして、邊境數州を合せてこれを管し、兵馬の權またその手に屬したりければ、今や殆ど獨立國の如く、朝廷之れを制することを能はざるに至りしなり。德宗精を勵し、その跋扈を抑えむとして果さず。順宗を經て憲宗に至り、帝英武なるが上に、杜黃裳・武元衡等の名臣ありしかば、遂に諸鎭を服するを得たり。

宦者の跋扈

帝の治世は、國內寧平にして、政績頗る觀るべかりしが、諸鎭を服して漸く政に倦みけるにや、驕奢に傾き、剩さへ良弼を斥け、佞臣を近づけ、終に宦者の毒手に斃れたり。唐代の初は宦者の勢さして著からざりしかど、後漸く政に與り、是に至りて專橫甚たしく、憲宗を弑してより、代々廢

立を恣にせり。文宗立つに及びて、深くこの弊を慨き、窃に計りてこれを除かむとせしが、謀洩れて果さざりき。是れより宦者の權遠く人主の右にあり、歴代諸帝その建置にあらざるはなかりき。

朋黨の軋轢

是時に當り、唐朝の弊事なほ他に存するあり、朋黨の軋轢これなり。文宗の頃、李德裕といふもの、李宗閔及牛僧孺の二人と隙あり、互に黨を結びて相爭ひ、政綱また爲に振はざりき。

唐末の大亂

かくて懿宗の後、國大に亂れ、僖宗嗣ぐに及んでは、王芝仙・黄巢の徒、四方を刼掠して勢猖獗なり。已にして王芝仙敗死したれども、黄巢の勢轉盛んに、帝をして蜀に逃れしむるに至りぬ。時に李克用といへるものあり、驍勇にして能く兵を用ゐき。帝の命を奉して黄巢を擊破し、以て賊を

平定せり。こゝにまた賊の降將に朱全忠といへるものあり、克用と隙を構へたりしが、次の帝昭宗立つに及びて、帝を挾みて宦者を殲しき、然るに帝の英氣に富める、全忠これを悅ばず、遂に之を弑して哀帝を立て、やがてこれをして位をおのれに禪らしめたり。是れを後梁太祖皇帝といへり。唐は高祖より二十世二百九十年、是に至りて亡びぬ。時に我紀元一千五百六十七年（醍醐天皇延喜七年）なり。

唐の滅亡

二十二　東方諸國（高句麗・百濟・新羅・渤海）の盛衰

神功皇后

高句麗・百濟・新羅、三國の創建既に之を述べたり。就中高句麗最強大にして、屢遼東の地を併せき。然るに新羅は最弱小にして、我が西國の邊民と葛藤やまず、神功皇后の御時に及びて遂に我に服しぬ。この時に當り、百濟高句麗と

隙あり、兵を交へたりしが、新羅我に降るとき、おのれもまた我が朝の助けを得むとや思ひけむ、使者來朝して貢獻を約しき。

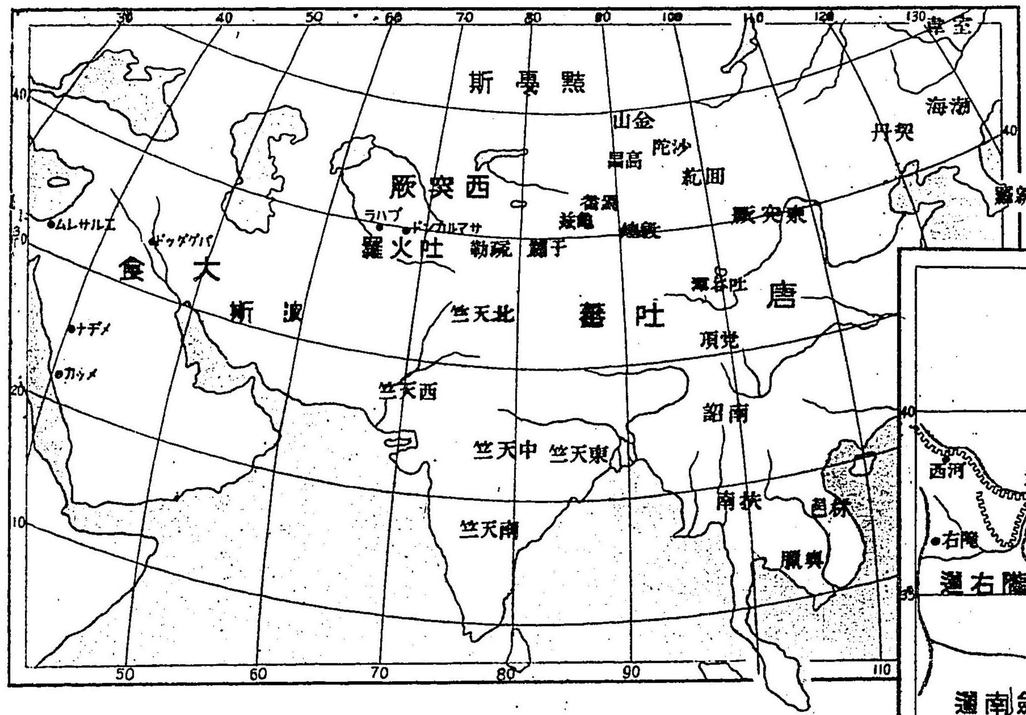
この頃支那にては、晉室衰替、胡夷國内を亂り、前秦の王符堅北方を併有して勢方に熾なり。高句麗・新羅欵をこれに通ぜり。儒學佛敎の高句麗に傳はりしは卽ちこの時にして、小獸林王方に王位にあり。當時百濟に君臨せるを近肖古王といふ。この國の文學もこの時より始まり佛敎の傳はりしも稍この後にありき。

儒學佛敎の傳來

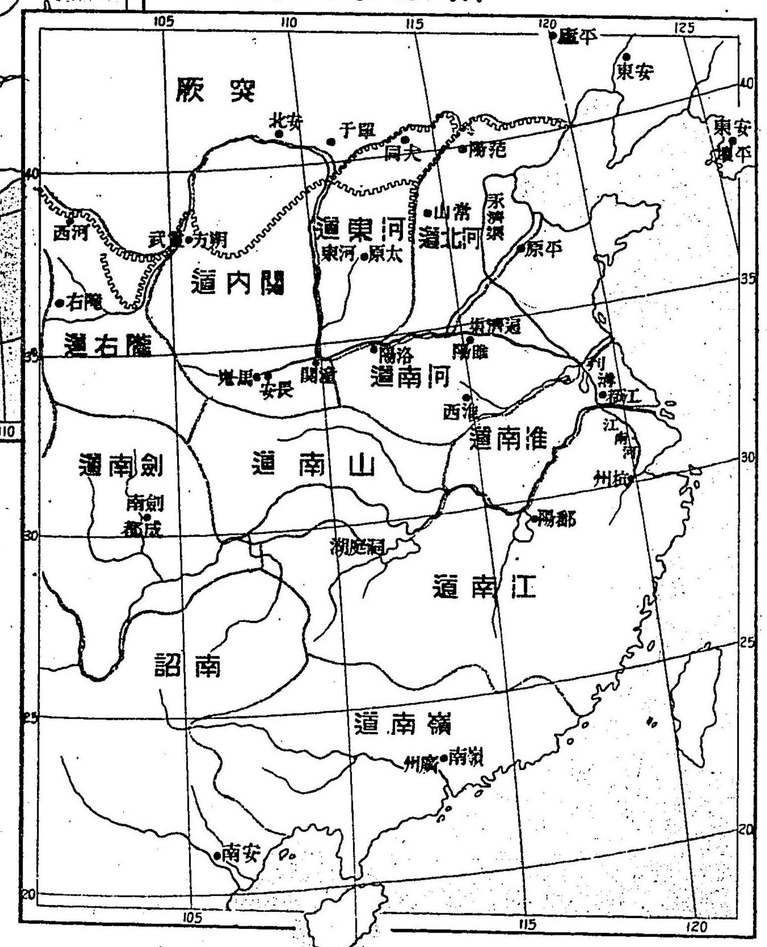
かくて高句麗に長壽王といへるあり、時は支那南北朝の初に當れり。これ實に高句麗最盛の時代にして、國富み兵强く、好を南北兩朝に通じ、南の方兵を新羅百濟に加へたり。是に於て新羅百濟と共に之を防ぎ、雄畧天皇もまた

高句麗の最盛時代

唐代東洋諸國


斯婁點
山金
陀沙
高昌
紇回
西突厥
海湖
丹契
靺新
東突厥
羅火吐
勒疏
于闐
吐蕃
唐
竺天北
竺天西
竺天中
竺天東
竺天南
頂党
詔南
南扶
邑林
厲與
大食
斯波
ムレサルエ
ドッゲゲバ
ナヂメ
カシメ

隋唐要地


突厥
北安
于單
同夫
陽范
廬平
東安
西河
武德
方期
右隴
關內道
河東道
東河
原太
山常
河北道
承濟渠
原平
隴右道
塩州
安長
關渡
隴洛
隴雎
河南道
西淮
淮南道
州揚
江南河
揚都
湖庭湖
江南道
劍南道
南劍
都成
山南道
詔南
嶺南道
州廣
南嶺
南安

新羅任那を滅す

隋高句麗を伐つ

百濟高句麗の滅亡

新羅半嶋を併す

百濟を援けて、之を擊ち給ひしかど、我軍利あらざりけり。已にして梁の時に至り、新羅に法興・眞興の二王相つぎ、任那を侵してその地を略せり。任那は半島南端なる我が領地にして、その滅亡は欽明天皇の御時なり。加之新羅はまた高句麗と結び、連に百濟をも困め、その勢漸く盛りなければ、後高句麗百濟と相結びて之に抗するに至りぬ。

當時支那にては、隋國内を統一し、煬帝大軍を發して高句麗に攻寄せたり。されどその軍大敗、却て自滅の端を發きしこと前に述へたるが如し。已にして唐の太宗もまた高句麗を略せむと欲し、親ら之を征したれど、また克たざりき。さて韓地にありては、高句麗百濟と相和し、我朝また百濟を助く。是に於て新羅は唐に請うて百濟を滅さしめ、尋て高句麗をも滅さしめたりしが、後唐内亂相踵ぐに及

渤海

東突厥の滅亡

びて、新羅遂に全半島を併有することを得たり。

新羅の半島を統一するや、北方に渤海國興れり。渤海、初靺鞨といふ。半は高句麗に屬せしが、こゝに至りて大祚榮出でゝ、滿州地方を服し、勢頗る振ふ。唐朝乃ち封じて渤海郡王となす。渤海の國號こゝに始まりぬ。これより後國力益〻進み、文化また漸く開く。その我國に朝貢して、誠實を表したるは既に國史に明なり。

二十三　西北諸國（突厥　回紇　吐蕃等）の盛衰、波斯大食の廢興

唐高祖が隋に代ることを得たるは、東突厥の援を借りたるを以てなり。當時この國に君長たりしを始畢可汗といふ。これより東突厥は唐を凌くの勢ありしが、始畢の弟

薛延陀と回紇との興亡及ひ歸服

西突厥の滅亡

頡利可汗に至りて、益〻驕り屢〻唐に寇せり。されごこれより人心漸く離れ、薛延陀・回紇等北方諸部先づ叛し、遂に唐の太宗に滅さる。是に於て薛延陀の酋長夷男、代りて北部の牛耳を執れり。已にして夷男死し、國滅び、回紇之に代り、諸部を率ゐて唐に歸せり。

かくて東突厥の地唐に歸したれども、西突厥は未だ服せず。是より先西突厥西部亞細亞を略して頗強大なりしが、この時更に分れて二となり、後合して一となり、遂に唐の高宗に滅されたり。

安祿山の反するや、回紇の葛勒可汗、肅宗の請ひに應じ、唐を援け賊を伐ちて功ありしより、世〻婚を通じて甥舅の國となり、吐蕃唐を侵すに及びて、また唐を援け國號を回鶻と改むるなど、唐と相親みたりしが、後漸く衰へ、武宗

吐蕃

波斯大食の廢興

の時に至りては、その衆散亡して殆んど盡きぬ。

吐蕃は今の西藏にして、地勢の然らしむるところ、古へ支那との交通なかりしが、太宗の頃棄宗弄贊この地に君長たるに及び、こゝに版圖を擴張せむと欲し、唐と吐谷渾の地に衝突するに至りき。吐谷渾は東晉の末、一たび青海地方を略して、勢稍盛なりしが、太宗の時に至りて唐に屬せしなり。是に至りて弄贊唐とこゝに戰ひ、終に和を請うて歸服せり。然れども後屢入寇し、却て唐の患となりき。

唐の太宗・高宗の代は、實に漢土極盛の時にして、その政令遠く四方に及べりしが、この時恰西部亞細亞に一大強國の興るあり。是れを大食國といふ。「マホメット」の創建にして、西洋史に所謂「サラセン」帝國これなり。その四方を略するや、歐羅巴・亞非利加にも侵入し、波斯は東に接せるを以て、擊ちてまたその地を取れり是れより先、波斯は西突厥の侵略に困弊せしが、唐西突厥を滅して稍安堵したる折しも、かく大食の兵を蒙りて、その地を失ひ、王子は唐に降りてその保護を受くるに至れり。時はこれ唐の百濟を滅したる稍以前にあり。さて大食は波斯を略するに先だち、使節を唐に遣し、好を修めしが、この後唐と相對して威を西部亞細亞に轟せり。

漢代の儒學

二十四　漢唐の儒學

支那の學術は周末に於て最發達したりしが、秦書を燒き、儒を坑にせしより、こゝに著くその進路を阻遏せり。漢興りて文運の回復を計り、惠帝先づ挾書の禁を除き、文景兩帝の間漸く隆興の運に向ひたれど、黃老の學のみ大に

唐代の儒學

行はれ、儒學に至りては未だ振はざりき。武帝ついで立つに及び、大學を起し、博士を置き、儒學を以て爲政の準となせり。是に於て天下靡然として儒を重んじ、董仲舒・公孫弘・孔安國等輩出し、劉向・楊雄等これにつぎ、後漢に至りては馬融・鄭玄等名儒を以てきこえたり。

後漢より隋に至るまで、儒家として名聲を博せしは、王肅・王弼・何晏・杜預・王通等なり。而して南北朝の際には、儒學もまた南北に分れ、各その所說を固執したりしが、唐朝に至りてこの兩派を融和し、太宗意を學事に留め、孔穎達等の五經正義成るに及び、世の經書を解するものをして大にその據るところを得しめき。

唐代に至りて儒學の隆盛を極めたりしこと、それかくの如しといへども、所謂訓話の學に過ぎずして、進んで新說を吐露すること實に稀なり。而して韓愈出でゝ、孟子の尊ぶべきを說き、老佛を排して群聖傳統の說を唱へ、儒道の爲に大に力を盡したりしは、この條を終るに臨んで特に記すべきなり。

漢の文藝

六朝の文藝

二十五　文藝

周代の學術界、その活動の熾んなりしこと、嘗て之を述べたり。然るに秦はひたすら武に傾きければ、文學の觀るべきものあらざりしが、前漢に至りて文士輩出し、策論を以て聞えたる賈誼あり、史筆以て著れたる司馬遷あり、詞賦を以て鳴りたる司馬相如あり、後漢にも班固出でゝ司馬遷と並び稱せられぬ。然れども三國を經、晉より隋に至るまでは、文辭華やかに流れ、四六駢儷の體流行したりけ

唐の文藝

れば、唐の初代はその餘弊を承けたりき。

かくて玄宗の時に至り、杜甫・李白等の詩人出でゝ、こゝに唐朝文學の精華を發揮せり。杜甫の沈痛雄壯なる、李白の飄逸放豪なる、實に古今に冠絶す。されども文章に至りては、なほ駢儷の體を脱するゝ能はざりしを、德宗の時に及んで、韓愈・柳宗元と盛んに古文の復興を唱へ、竟に能く從來の陋弊を一洗することを得たり。愈の謹嚴なる、宗元の雄健なる、正にこれ文界の宗。この後白居易・杜牧等また詩賦を以て名あり、中にも白居易のは我國に傳はりて、國人の間朗詠吟誦せられたり。

書

この時に當り虞世南・歐陽詢・顏眞卿等、筆蹟を以てその名を博せり。こはこれ唐朝考試に書法の優なるを尚びし故なり。初晉の時王羲之出でゝ書體の精を極めしより、その宗と稱せられき。書法の發達は實に此頃より著かりき。

次に書の序を以て畫につきて述べむ。畫は漢以來漸く進み、南北朝の際、顧愷之・陸探微・張僧繇等之を以て著れしが、唐に至りては玄宗の時吳道子・李思訓・王維等輩出せり。中にも吳道子の筆は我國人の稱賛して措かざるところなり。

畫

外國僧の渡來

佛教諸宗

二十六　佛教・道教

晉以來佛教漸く流行し、佛圖澄・鳩摩羅什・達磨等、外國僧來りぬ。佛圖澄は後趙に、鳩摩羅什は後秦に、何れも王者の尊信を受く。達磨は梁に至り、武帝と佛理を談じ、帝の旨を得ざりきといへども、實に禪宗の祖たり。

かくて支那には律・三論・淨土・禪・華嚴・天台等の諸宗、前後

玄奘印度に入る

三武の禍

道教

起りしが、唐に至りて益隆盛を極め法相・眞言の二宗新に起りぬ。太宗の時玄奘、陸路印度に入り、釋迦の舊跡を探り、六百有餘部の佛典を齎し、大に佛教界に光彩を放てり。是れより先、東晉の末葉に法顯あり、後魏の末世に宋雲等あり、皆印度に赴きたれども、玄奘最著る。後高宗の時義淨もまた海路印度に達し、多くの佛典を得て歸りきたる。

唐代佛教の隆なる、寺院數萬、僧尼數十萬に及びしが、武宗に至りて道教を尊び、多く寺院を毀ち、僧尼を還俗せしむるなど、いたく佛教を禁壓したりければ、佛教頗る衰微せり。案ずるに漢土古來佛教を斥けたるもの三あり、後魏の太武帝、周の武帝、及び唐の武宗にして、佛者の所謂三武の禍といへるこれなり。

佛教の流布と共に、道教といふもの支那に行はれたり。

祆教

特に唐室は李姓にして、道教の祖と崇むる老子と同姓なるを以て、厚く之れを尊重したりき。されど老子の教は即ち道教にはあらで、後世老莊の所說に附會して、神仙をいへるなり。而して秦の始皇・漢の武帝の如きこれを信ずること淺からざりしが、魏・晉・南北朝に至りて益隆んに、佛教と相對して純乎たる宗教の如くなりぬ。かくて唐室の幇助を得るに及んで、愈盛大に、玄宗の時には家毎に老子道德經一本を藏せしむなど、頗る之を奬勵せり。こゝに至りて武宗その徒を率ゐ、大に佛教を排斥したるなり。

二十七　祆教景教の東流南海の貿易

佛教道教の流行と共に、祆教といふもまた支那地方に行はれたり。こはもと「ゾロアスター」の創めたる宗教にし

景教

て、神に善にして明なること、惡にして暗なることあるを說き火を敬し、天日を拜し、以て善神に事ふることなせり。その始て支那に傳はりしは、南北朝の頃にて、波斯より來れり。これもと波斯の國敎にして、西域諸國に隆んなりしを、大食國勃興して波斯を略するに至りしかば、この敎徒東に逃れて支那に入り、よりて之を傳へたるなり。

外敎の傳來はひとり祆敎にとどまらず、耶蘇敎の一派景敎もまた此頃に傳はりぬ。こは「チストリウス」の唱道せるところにして、また波斯に行はれたりしが、遂に東流して支那に入りたるなり。唐の大宗の時、景敎の僧に何羅本（アロペン）といふもの、その經典を齎して長安に來りぬ。帝ためにに波斯寺を創建す。後玄宗の時に至りすべて波斯寺を大秦寺と改稱せり。大秦は即ち羅馬なり。

摩尼敎
回敎

諸外敎の衰微

南海の貿易

この他當時支那に行はれたる外敎に、摩尼敎と回敎とあり。前者は摩尼といへるもの、唱道せるところ、肅宗の頃より漸く內地に入りき。後者は「マホメット」の創めたるもの、大食國の勃興は實にこの宗敎の結果なり。されば、これまた大食との交通につれて傳來し、西北地方に行はれたり。

これ等の諸外敎はかく流行したれども、武宗大に道敎を尊重するに及び、根柢最深き佛敎すら、いたく禁壓せらるゝに當り、これらも同じく斥けられ、共に衰運に陷りぬ。

かく諸外敎の東流せるは、西部亞細亞と支那との交通いかに繁多なりしかを證せるものなり。當時唐と大食とは亞細亞大陸に於ける兩大國にして、その間の交通海陸共に盛なりき。中にも海上の交通は、佛敎の東流につれて、印度との間に開けしより、後漸次發達して、支那の商船頻

梁

唐

に印度洋を往來したりしが、大食國起るに及んで、この國の船舶支那の南海に輻湊し、このわたりの諸港、實に盛大なる東西貿易場となりぬ。

二十八　五代　宋の初世

太祖の創業　宋遼の關係　仁宗の治

後梁の太祖唐に代りて帝位に登れりといへども、李克用等諸州に據りて之れに抗しぬ。已にして克用の死後、その子存勗、梁の弊に乘じて之を滅し、國號を唐と稱しき。後唐の莊宗皇帝これなり。（我が紀元一千五百八十三年　醍醐天皇　延長元年）

然るに莊宗梁に克ちて意驕り、國また亂る。克用の養子李嗣源、將士に推載せられて帝位に即けり。これを明宗皇帝といふ。帝の政を爲すや、兵革その用罕にして、年穀また

晉

漢

屢豐に、實に五代史中の小唐たり。されど帝の崩後宗室亂れ、石敬塘といふもの、契丹の兵を借り唐を滅して位に即けり。後晉の高祖皇帝これなり。（我紀元一千五百九十六年、朱雀天皇　承平六年）

後晉の高祖はかく契丹の援を得て唐を滅したるが故、北部諸州を割き、厚く金帛を贈りて臣と稱せしが出帝立に及びて、禮を契丹に失ひければ、契丹怒りて大舉來犯し、帝を擒にて歸りき。

かくて契丹の兵退くに及びて、晉將劉知遠起て帝號を稱せり。後漢の高祖皇帝これなり。而してこの朝もまた久しからず、次の隱帝に至りて、その臣郭威衆に推されて即位せり。これを後周の太祖皇帝といふ。（我が紀元一千六百十一年、村上天皇　天曆五年）

周

宋太祖の創業

後周の太祖に次て養子世宗立てり。帝性英明、特に武事に長ず。在位六年に過ぎざれども、よく四方をしてその正朔を奉ぜしめたり。崩後子恭帝立つ。年尚幼なり。將軍趙匡胤遂にその禪をうけて帝位に即けり。宋の太祖皇帝即ちこれなり。(我紀元一千六百二十年、村上天皇天德四年)唐の滅亡よりこゝに至るまで、梁・唐・晉・漢・周の五姓興亡したれば、史上これを五代といふ。

宋の太祖趙匡胤はもと周の世宗の功臣なり。大に將士の心を得、遂にその戴くところとなりき。位に即くや、梁以來方隅に割據したる列國を平げ、積弊久しき藩鎭の權を抑え、宿衞の勢を制し、意を民力休養に專にし、刑罰を寬にし、屢國子監に幸して、文學を奬勵せり。

太祖略列國を併せたりといへども、未全く統一するに

宋太宗の統一

宋遼の和

仁宗の治

至らざりき。帝崩じて弟太宗立つに及んで、こゝに全土統一の偉業を終へたり。太宗につぎて立てるは子眞宗なり。時に遼主聖宗大舉來寇す。群臣その鋭鋒を避けむと議す。然るに寇準獨り親征の議を定め、大に遼軍を破る。是に於て兩國の和成り、俱に兄弟の約を結びて兵を解けり。遼もと契丹といふ。五代の初耶律阿保機といふもの、始めて帝と稱せり。契丹の太祖これなり。太祖大に四境を略せしが、東の方渤海の衰運に乘じて之れを滅し、子太宗後をつぎたり。時しもあれ、後晉の高祖この援をうけて唐を滅しゝかば、爾來常に中國を輕んじ屢國邊に寇せるなり。

眞宗につぎて子仁宗立てり。この時西夏の來侵あり、宋朝ために兵を西に用ゐしが、遼またこの機に乘じて南下せむとす。帝是に於て夏主を封じて夏國王としたり。夏は

唐末の亂に黄巢を討ちて功ありし拓跋思恭の裔なり。こゝに至りて元昊いふもの、太夏皇帝と稱し遂に宋に寇せり。

仁宗の代はかく外國に事ありしのみならず、廷臣分れて二となり、軋轢甚しかりしが、帝范仲淹・歐陽修等を用ゐて、政を修めしかば、百官法を奉じ、朝廷治を稱せり。然れどもその爲政の方針、專ら文に傾きたれば、武威終に揚がらざりしぞ惜かりし。

二十九　神宗の新法　哲宗の改復　徽宗の紹述

神宗の新法

仁宗より英宗を經て神宗立てり。帝年少にして英氣あり、遼夏に受けたる先代の屈辱を雪ぎ、更に國威を伸張せむと欲し、王安石を擧げてその志を輔けしむ。安石乃ち均輸・青苗・募役・市易及び保甲・保馬等の諸新法を布き、以て一大改革を行へり。然るに事甚急劇にして、百姓怨嗟し、蘇軾・蘇轍・范純仁・司馬光・程顥・程頤等皆之を非議せり。然れども廷臣擧て安石の黨なりければ、之に阿附するもののみ多かりき。

王安石

神宗の外征

內政の事かくの如し。而して神宗は鋭意外征を企てしが、南交趾を伐ちて利あらず、西夏を服せむとして敗れ、剩さへ兵政の改革は遼に疑はれ、北邊の地を割きて之に與ふるの已むを得ざるに至りぬ。是に於て帝の英氣も終に伸ぶることを得ざりき。

哲宗の改復

神宗崩じて子哲宗立つ。年幼なり。太后高氏政を聽く。新法を廢し、安石の黨を黜け、司馬光等を擧げて政を輔けし

熙豐黨と元祐黨

む。史上安石の黨を熙豐黨といひ、司馬光等を元祐黨といへり。光の政を執るや、精勵治を圖り、太后また至公を以て朝に臨み、多く賢才を登用せり。是に於て海内太平を想望せしが、惜いかな光執政八ヶ月にして卒し、その黨分裂して相爭ひ、熙豐黨其の隙を窺へり。されば太后崩じて、哲宗政を親にするに及び、章惇等、熙豐黨を率ゐて朝に立ち、頻に反對黨を貶黜せり。

徽宗の紹述

哲宗崩じて弟徽宗立てり。太后向氏また政を攝し、韓忠彦等の元祐黨を用ゐたりしが、幾程もなく、帝親ら政を視るに至り、努めて熙豐の政を紹述せむと欲せしかば、蔡京等朝に入り、熙豐黨また權を振ひ、帝をして徒に奢侈に耽らしめたり。是に於て朝政日に非にして、國步月に艱難なり。

金の勃興

三十　遼金の廢興

徽宗帝の宋に君臨せる時、遼は天祚帝方に位に在りき。當時遼の國運漸く傾き、政頗亂れたり。金乃ちこの機に乘じて興りぬ。金初女眞といふ。渤海と同種族なり。その遼に近きを熟女眞といひ遠きを生女眞といふ。共に遼に服屬したりき。こゝに生女眞の長に阿骨打といふものあり、遼に叛きて連りにその軍を破り、國號を建てゝ金と稱し、自ら帝位に登れり、金の太祖これなり。

この時に當り、宋の蔡京の黨に童貫といへるあり、以爲らく遼を征服するの機失ふべからずと、使を金に遣し、共に遼を夾擊してその地を分ち、從來遼に贈りし歲幣を金に納れむと約しぬ。然るに宋軍利あらず、獨り金軍のみ毎

遼の滅亡

戰勝たざることなく、遂に天祚帝を走らしめたり。是に於て金は前約を拒み、燕京の空城と、その附近僅に六州の地とを宋に與へき。遼帝西走して、身を西夏に寄せむとせしが金は地を西夏に割きてこを拒ませければ、流浪の餘金軍に執へられけり。遼は契丹の太祖よりこゝに至るまで、九世二百十年にして亡びぬ。時に我が紀元一千七百八十五年、(崇德天皇天治二年)なり。

遼の亡ぶるに際し、その宗室に耶律大石(タイシ)といふあり、西走して中央亞細亞に西遼國を建てたり。されどこは後章に述ぶるを便とす。

三十一　宋金の交渉

當時金の太祖祖し、弟太宗嗣きたりしが、既に宋と境を

金の太宗の南侵

南宋

接せるを以て、こゝに南侵の機乘ずべきを待てり。會、宋が遼の降將を納れたるを名となし、兵を發して宋を侵しき。宋の徽宗帝いたくこれを憂へ、自ら責をひきて位を子欽宗に傳へ、欽宗も李綱の議を納れて固守するに決せしが、遂に宰相李邦彥の言を用ゐ、莫大の金幣を贈り、北部の三鎭を割き、質を入れて和を講しぬ。されど金が圖南の欲望は未だ滿たすに足らず、幾程もなくまた來侵して汴京を圍み、帝と上皇とを虜にし、大に金帛を掠めて去りぬ。時に我が紀元千七百八十七年、(崇德天皇大治二年)なり

金軍の北に歸るや、張邦昌を立てゝ楚帝なしたれども、邦昌もとより國人の服せざるを知り、高宗を迎立つ。高宗李綱等を用ゐて、恢復を圖りしかど、黃潛善等事を用ゐるに及び、金軍を避けて南遷し、遂に臨安に都せり。史上この

秦檜の和議說

兩朝の明君

後を南宋といへり。

この時に當り、張浚・岳飛等の諸將、力戰して敵を拒きしが、帝秦檜が和議說を納れ、彼れをして專ら和を講せしめたり。時に金は太宗既に殂し、從孫熙宗の代なりしが、一たび約せる和を破りて、復南侵せり。岳飛等逆擊之を破り、勢頗張りしに、惜むべし秦檜なほ和を唱へ、金の封册を受けて和を約し、主戰說を唱ふるものを抑制して之を刑せり。

かくて金の熙宗は從弟亮に弑せられ、亮も淫虐を極めてまた國人に弑せらる。而して後金に君臨したるは世宗にして、實に金室中興の英主なり。時に宋の孝宗方に帝位にあり、また賢明なり。北方を恢復せむと計りしが、果さず和また成りぬ。この後光宗を經て寧宗の時に至り、韓侂胄といふもの權柄を弄し、當時の碩學朱熹等を斥け、剩さへ

韓侂胄

宋代の儒學

朱熹

功名を貪らむとて、兵を金に加へしが、却て敗れ、金軍來侵すること急なり。是に於て宋遂に侂胄を殺して和を講ずることを得たり。

三十二　宋代の儒學文藝

漢唐の儒學は訓詁注疏の學なりしこと、上文既に述べたるが如くなりしが、宋代に至りては著く發達して、窮理の學興り、哲學思想は大に儒學の上に現れたり。仁宗の時胡瑗先づ實學を唱へ、周敦頤・邵雍共に理學を創めき。後程顥・程頤の兄弟、敦頤の門に出で、この學を繼承し、二程の名世に著る。南宋の朱熹出づるに及んで、こゝに周程の學を大成し後世學者の師宗となりぬ。その著四書集註・小學等遍く世に行はる。熹と同時代に陸九淵あり、熹と說を異に

宋代の文藝

唐宋八大家

書畫

してまた一派を成せり。

詩文は唐末の大亂に遭ひて一たび衰へたりしを、宋に至りて歐陽修出でゝ之を挽回せり。修の門に曾鞏・王安石出づ。また文を能くす。蘇洵及びその子蘇軾・蘇轍また時を同うせり。後世文をいふもの、この六人に唐代の韓柳を加へて、これを唐宋の八大家と稱せり。詩は歐陽修をはじめ、梅堯臣・黃庭堅等最知られたり。而して南宋に至りては、文辭のみるべきものなきにあらねど、正に國運と共に衰へたりき。

宋代は書畫の枝も頗進み、蔡襄等書を以て、李公麟等畫は以て有名なり。

三十三　宋代の高麗

新羅の滅亡

高麗太祖の統一

高麗の盛衰

新羅朝鮮半島を統一して、數世の間こそ太平無事なりけれ、後漸く衰へ、唐末に至りては、眞聖女王政を失ひ、弓裔は鐵圓に據りて北部を略し、甄萱は完山に據りて後百濟を建てたり。已にして王建といふもの、弓裔の部將より起り、その地を領して國を高麗と號せり。是に於て世はまた三國鼎立の舊態に復せしが、遂に王建に統一せられたり。時に五代晉の初なり。

王建三國を統一せり。高麗の太祖是れなり。當時支那の正朔を奉じて國威頗揚りたれど、遼の聖宗の攻伐をうけ、遂に支ふること能はず、その屬國となり、後金興るに及んで、また遼に對せる禮を以てこれに事へ、その間專ら國內の安泰を計りき。されば當時は文化の進歩も見るべかりしかど、宋末に至りては武臣權を弄し、政綱大に紊亂した。

り。

大食國の分裂

「サマン」家

三十四　大食國の分裂　印度に於ける回教國　西遼の建國

大食國は「マホメッド」の創建以來、國勢益盛んなりしが、唐の玄宗・肅宗の頃に至りて、內亂の餘、分れて東西二國となり、東は「バグダッド」を都とし、西は遠く西班牙の地に都を奠めたり。この後二國共に學藝を奬勵し、中にも東大食國は文化最盛の點に達せしが、其極まる所漸く衰運に傾き、「ハリフ」は遂に宗教上の王位を有するばかりにて、政治上の大權は、各地なる「サルタン」の掌握に歸し、大食國はこゝに分裂したり。

かくて唐末に至り「サマン」家波斯人より起りて、阿母河

「ガズニ」家

印度に於ける回教國

「セルヂュッカ」家

西遼の建國

の東西、天山の西より波斯灣に至る、大版圖を領せしが、後その東部は回鶻の餘族に略せられ、西部は西突厥の有となりぬ。時方に宋の初代なりき。

初「サマン」家の配下に「ガズニ」家ありて、西突厥の餘裔より興りたるありしが、その「マームード」といふもの「サルタン」となり、かく主家の領を取りたるなり、已にして「マームード」は、その回教徒を率ゐて印度北部を攻略し、こゝに回教國を建てたり。已にして當時興りし「セルヂュッカ」家は、また「ガズニ」家の領を奪ひ、中西兩部亞細亞を併有して其威甚盛んなりしが、宋の哲宗の頃より漸く衰へ、遂に中央亞細亞に西遼國興りぬ。

西遼はまた黑契丹と稱す、遼の金に滅さるゝや、その宗室に耶律大石といふあり、西走して恢復を圖りしが、遂に

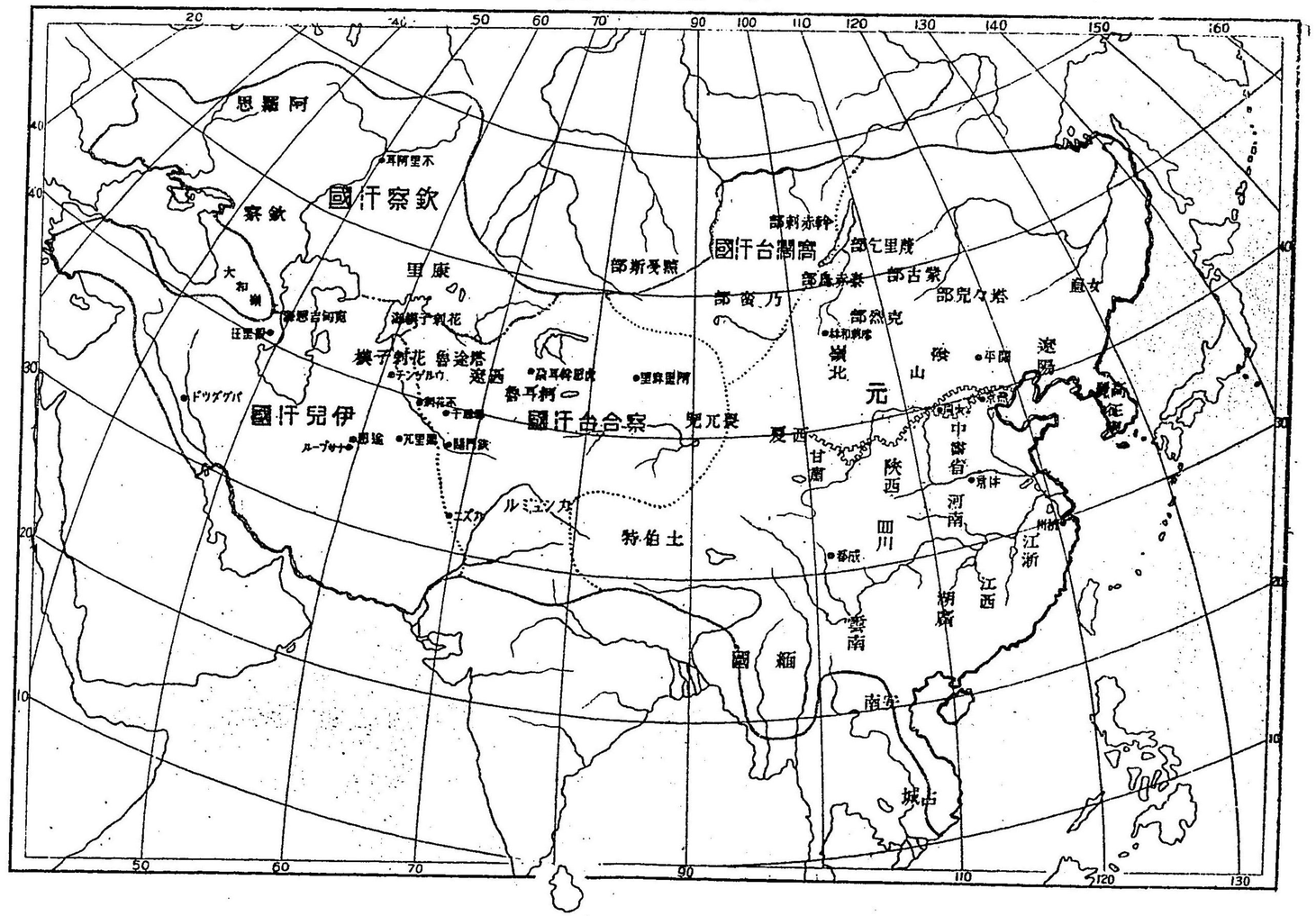
「セルヂュッカ」家と戰て中央亞細亞を取り、こゝに帝位に即きぬ。史上德宗といへるこれなり。時は宗の徽宗の末年に當れり。

三十五　蒙古の勃興　元太祖の西征

蒙古の勃興

宋金分爭の交、蒙古新に漠北に興れり。蒙古の本土は黑龍江の上流なり。南宋の初、也速該（エスガイ）といふものこのわたりの諸部を併せたりしが、その子鐵木眞（テムジン）年十三にして後を嗣き、漸く內外蒙古の地を取り、遂に蒙古大汗の位に登りぬ。これ即ち有名なる成吉思汗（ジンギスカン）にして、元の太祖といへるこれなり。かくて太祖は西夏を討ちて之を降し、その鋭鋒を轉じて東の方金に向へり。時に金は國勢既に傾き、力敵すべからず。時の帝宣宗金帛を入れて和を請へり。これよ

蒙古帝國


阿羅思
欽察汗國
欽察
大和崩
里康
伊兒汗國
察合台汗國
窩闊台汗國
部斯爲黠
部剌赤斡
部乞里茂
部古紫
部兒々塔
部乃蠻
部烈克
崑崙山
遼陽
元
夏西
甘肅
陝西
河南
四川
江浙
江西
湖廣
雲南
緬國
南安
城占
特伯土
ルミュンカ
ルーブサナ
思途
元里麗
關門鐵
ドゥゲバ
ズカ
番成
平陽
京師
中書省
杭州
直女

元太祖の西征

乃蠻部亡ぶ

花剌子模の興亡

り金の領土益々蹙まりき。

是れより先乃蠻部は太祖に滅され、その部長の子屈出律餘衆を率ゐて、西遼に身を寄せたりしが、是に至りて屈出律、花剌子模王「マホメッド」と通じて、西遼を滅し、その地を領して蒙古の隙を窺へり。是に於て太祖兵を發し、屈出律を殺して、中央亞細亞を併せ、ここに花剌子模と境を接するに至りぬ。

花剌子模王家は、もと「セルヂユッカ」家の部將の後なり。主家滅亡の後、西遼に服したれども、遂に屈出律と之を滅し、更に「ゴール」家を破りて阿富汗斯坦を併せ、威方に亞細亞西部に揚れり。「ゴール」家は前章に述べたる「ガズニ」家の衰弱に乘じて之に代り、當時印度をも領したりき。さて花剌子模國人、會、蒙古の使者を殺しゝかば、太祖いたく憤り、親ら

蒙古軍一は印度に入り一は露國の地に入る

兵を率ゐて來攻むるに及び、國土を舉げて之れを失ひ、身は遂に客死したりき。

花剌子模の滅ぶるや、蒙古の軍一は王子を追うて印度に入り、一は「マホメット」追擊の餘勢を以て、露西亞の地に入り、攻掠を逞うして歸りき。時に我紀元一千八百八十四年（後堀河天皇元仁元年）にして、南宋の理宗即位の前年なり。

三十六　元太宗の南略・拔都の西征

元太宗金を滅す

元の太祖既に花剌子模を伐ちて凱旋するや、更に西夏を討滅し、勢に乘じて金を侵さんとす。途にして崩せり。是に於て太祖の第三子窩濶台（オクタイ）、諸王群將に推されて大汗の位に即きぬ。太宗皇帝これなり。太宗先づ父の志を繼ぎ、金を伐ちて哀宗を走らせ、やがて宋の理宗に說きて金を擊たしめ、共に之を滅しき。金は帝と稱せしこと九世百十七年にして滅ひぬ。時に我紀元一千八百九十四年（四條天皇文暦元年）なり。

太宗宋及び高麗を伐つ

然るに宋はこの時を以て北方を恢復せむと欲し、和を破りければ、太宗軍を發して宋を侵さしめ、また東の方高麗を降し、西の方遠征軍を露西亞の地に送れり。さて西征軍の元師は、太宗の姪、拔都（バツ）なりき。拔都進んで露西亞を蹂躪し、匈牙利を攻掠し、波蘭（ポーランド）に侵入し、「ワールスタット」の激戰に大勝を得たり。是に於て全歐震駭一にその襲來を恐れしが、會太宗崩ぜしかば、（我紀元一千九百〇一年四條天皇仁治二年）、こゝに軍を班し、拔都は國を南部露西亞に建てたり。欽察（キプチャク）國これなり。

拔都の西征

元憲宗の南征

三十七　元憲宗の南征　旭烈兀の西征

元太宗崩じて、その子貴由立つ。之れを定宗といふ。已にして崩じ拖雷の子蒙哥大汗となりぬ。之を憲宗と云ふ。憲宗其弟忽必烈をして南方を經略せしむ。忽必烈まづ大理を略し、尋で吐蕃を平らげ、更に部將をして交趾を侵さしめて之を降しき。

これより先、宋は蒙古と共に金を滅したれども、尋て約を破りために蒙古と兵を構ふるに至りしが、是に至りて憲宗南方三國を降せる勢に乘じ、自ら大軍を率ぬ、忽必烈等と共に三道より進んで宋を侵せり。その鋒頗る鋭し。時に宋の賈似道、理宗の命を受けて忽必烈の軍に當りしが、いたく恐れて密に臣と稱し、幣を納れ、地を割きて、和を請へり。偶、元の憲宗崩ぜしかば、忽必烈も遂に和を許し師を班しき。然るに似道はこの次第を秘し、剩さへおのが力にて敵を退けたりと奏して、その賞厚かりけり。

旭烈兀の西征

憲宗はかく南方を經略せるのみならず、別にその弟旭烈兀をして西征の途に上らしめたり。初め花剌子模の亡ぶるに際し、王子出奔して印度に入りしが、後回復を計りたれど、果さずして敗死せり。然れども波斯の北部なほ回教徒の據れるあり、蒙古の威末遍からず。旭烈兀乃ち此の地を定め、進んで「バグダット」を攻落し、「ハリフ」「アルムスタッシム」を殺しき。是に於て大食國全く滅亡せり。時に我紀元一千九百十八年（後深草天皇正嘉二年）なり。これより旭烈兀は「シリア」に攻入りしが、會、憲宗崩じて事止みぬ。

大食國の滅亡

三十八　元世祖の一統及東侵

蒙古國號を元と稱す

宋恭帝元に降る

憲宗崩じて、弟忽必烈大汗の位に即き、宗室の內訌を定め、燕京に都して、國號を元と稱せり。元の世祖是れなり。時に宋は賈似道專ら事を用ゐ、國運日に傾き、北方漸く元の有に歸す。已にして世祖伯顏等を遣して、大舉宋を伐たしむ。この時恭帝方に帝位にあり、似道は斥けられ、文天祥・張世傑等勤王の諸將、徵に應じて入衞したりしかど、元軍臨安に迫るに及び、帝遂に出降りき。

張世傑等屈せず、皇兄端宗を立てゝ福州に據り、恢復を計りたれど、また敗れ、海路西走す。端宗遂に崩じぬ。是に於て遺臣等また恭帝の弟帝昺を立てゝ崖山を守りしかど、こゝも陷り帝昺海に投じて崩せり。太祖より十八世三百

元の一統、宋の滅亡

蒙古我が國に來寇す

世祖の南方經略

二十年、宋室こゝに至りて全く亡び元之れに代りぬ。時に我紀元一千九百三十九年（後宇多天皇弘安二年）なり。

是れより先、高麗の元宗、元の世祖の力をかり、內亂を鎭定せしより元の藩屏たりしかば、世祖は更に我國をも服せむと欲せしが、その使者屢退けられしを憤り、兵を發して來り侵さしめたり。已にして宋を滅したる勢を以て大擧また襲來せしが、我軍暴風雨に乘じて殆んど之を殲したりき。時に我紀元一千九百四十一年（後宇多天皇弘安四年）なり。

かくて世祖は我朝にこそ志を得ざりしか、南方の經略に至りては成功少なからざりき。交趾の降伏以來、安南の地一たび定まりたれども、是に至りて、交趾また命を用ゐざりしかば之を征定し、加之緬甸・暹羅の地方をも服して、貢物を納れしめ、更に威力を南洋諸島に及ぼしたり。

蒙古帝國の版圖

四汗國

海都の興亡

三十九　海都の興亡　元代の治亂

欽察、察合臺、伊兒汗三國の盛衰

太祖の創業以來、蒙古の領土漸く膨脹し、今や亞細亞の大部は更なり、歐羅巴にさへ跨れる一大帝國を形成せり。而して之れを統括せるは、實に元の世祖なり。然れども世祖が直轄するところは、東部亞細亞のみにして、他は既に四汗國ありて之を分轄したりき。四汗國とは欽察、察合臺、窩濶臺及ひ伊兒これなり。

欽察汗國は拔都の子孫、察合臺汗國は察合臺の子孫、窩濶臺汗國と窩濶臺の子孫、伊兒汗國は旭烈兀の子孫、各之を領せり。初憲宗卽位のとき、太宗の一族之を肯ぜざりしが、世祖大汗たるに及んで、益不平なりき。是に於て窩濶臺

窩濶臺汗國の滅亡

汗たる太宗の孫、海都は世祖に抗して叛旗を擧げたり。世祖乃ち欽察汗蒙哥帖木兒、察合臺汗八剌、兩汗をして之を制せしめむと計りしが、海都は遂にこの兩汗と結びて蒙古大汗となりぬ。時に伊兒汗阿入哈は、旭烈兀の子にして、世祖に親しく欽察汗と相爭ひければ、こゝに至りて三汗の侵擊を蒙れり。已にして海都は察合臺汗國の兵を合せて、世祖を攻め、また滿州の諸王に說きて、おのれに應ぜしむ。世祖伯顏を遣して海都を拒がしめ、親ら滿州を平定せり。かくて海都もさすがに志を得ず、世祖崩じて孫成宗の時に至りて歿しぬ。海都の子を察八兒といふ。その後をつぎて窩濶臺汗となりしが、武宗の時に至りて遂に降りしかば、窩濶臺汗國是に於て亡びぬ。（我紀元一千九百六十八年花園天皇延慶元年）

三汗國及び元室の衰頽

窩濶臺汗國亡び、他の三汗國も威振はずなりしが、この後元室もまた内憂多く、國運漸く傾けり。武宗につぎてその弟仁宗立てり。これより順宗に至るまで二十餘年の間、鐵木迭兒・燕帖木兒・伯顏等前後權を恣にして、弑逆相踵ぎ、財政困難にして民重稅に苦めり。是に於て政令行はれず、盜賊蜂起し、久しく蒙古に屈服したる漢人種は、この機に乘じて起てり。かくて徐壽輝・郭子興・張士誠等各帝王の稱を用ゐて勢盛なり。子興の部將に朱元璋といへるあり、遂に群雄を掃蕩して江南の地を定め、北上して元都燕京を陷れ、順帝を逐へり。元璋乃ち帝位に卽き、國を明と號しき。明の太祖皇帝これなり。元は世祖國號を建てしより、十世八十八年にして亡びぬ。時に我紀元二千二十八年（南朝後龜山天皇正平二十三年）なり。

元の滅亡

第三編　近世史

四十　明の初世

太祖の創業　靖難の役　成祖の遠略

明の太祖既に帝位に卽きたれども、元の順帝なほ北方に帝號を有せり。太祖乃ち徐達・李文忠等をして北伐せしむ。かくて順帝崩じたれど、その遺族なほ明に抗せしが、太祖また兵を發して之れを平定せり。この時に當り四川・雲南の地も未だ服せざりければ、帝また將士を遣して之を征服し、更に南方の諸蠻をも降して、こゝに海内を一統したり。

明太祖の一統

太祖の政

帝また意を政治に留め、學問を勵し、教化を布き、律令を修め、賞罰を明かにし、加之諸子を四方に封じて、宗室の藩屏たらしめ、後世子孫に利なからしめむとて、諸功臣を殺

しき。

太祖の崩後、太孫惠帝立てり。時に諸藩王の勢甚盛なり。帝之を抑壓せむとす。是に於て叔父燕王棣反し、大擧して京師金陵に逼りぬ。然るに宿將既に剪滅せられ、將帥の之に當るべきなかりければ、京師遂に陷り、帝の踪跡知るべからず。燕王卽ち帝位に卽きぬ。成祖皇帝これなり。世にこの變を靖難の役といへり。

靖難の役

成祖の遠略

成祖位に卽くや、都を燕京に遷しき。帝四方を征定せむの志あり、先づ安南を伐ちてその內訌を定め、交趾布政司を置きてこの地を總べ、更に南海諸島をして來聘せしめ、また親ら軍を率ゐ、北の方元の遺族を征して之を降し、瓦剌部を伐ちて之を破りき。蒙古は北走以來、弑簒相踵ぎ、其衆殆んど潰散せしかど、是に至りて順帝の裔、本雅矢里其臣阿魯臺に擁立せられて、なほ韃靼の可汗位にありければ、帝之を諭して招きたれど、應せず、その使者をさへ殺しゝかば、帝遂に親征して本雅矢里を破り、阿魯臺を降し、更に漠北に雄視せる瓦剌部をも破りしなり。

四十一　帖木兒大王の兼併

帖木兒帝位に卽く

察合台汗國亡ぶ

察合臺汗國は內亂相踵ぎ、元室の衰頽と共に國勢益傾きぬ。時に帖木兒といへるあり、この內亂に乘じて、中央亞細亞を略し、(明の太祖の卽位に後るゝこと二年)遂に帝位に「サマルカンド」に卽けり。かくて察合臺汗國平ぎたれば、更に伊兒汗國の衰微に乘じ、兵をすゝめてその地を取り、餘威を以て欽察汗國に向へり。

是れより先、欽察汗國は蒙哥帖木兒以來、國運漸く進み、

欽察汗國の盛衰

元末順帝の頃に至りては、武威四隣を服するに至りしかど、衰弱の端もまた此時に發け、内亂起りて國内騒擾せり。時に拔都の弟脱哈帖木兒の裔に圖克達密西（トクタミシ）といふあり、帖木兒の助けを得て欽察汗位に登るを得たりき。然るにその勢熾んなるに及んで、花剌子模の地を併せむと欲し、兵を進めて帖木兒が所領を侵せり。是に於て帖木兒大に怒り、自ら兵を率ゐて圖克達密西を擊破し、露西亞の地を蹂躙して兵を班しき。

帖木兒印度に侵入す

帖木兒已に三汗國を戡定したれば、更に鋭鋒を轉じて印度に進擊す。これよりさき印度は「ゴール」家亡びて、奴隷迭主家の領を奪ひたる、所謂奴隷王朝の代も過ぎ、今や方に「トグラック」朝の末代に當りて、國勢いたく萎微せるの時なり。されば國中帖木兒の蹂躙に委し、能く之を防ぐものなく、王都「デルヒ」は忽ち陷りたり。この時恰も「オスマン」帝國の隆盛なるをきゝ、こゝに師を班して西征の途に上りぬ。

「オスマン」帝國

「オスマン」帝國は、元の太祖に逐はれて小亞細亞に入りたる、突厥種の建設にかゝり「バエジット」といふもの方に帝位にあり。歐羅巴に攻入りて其威を振ひたりしが、帖木兒と「アンゴラ」に戰ひて敗れ、身は遂に虜となりぬ。時に我紀元二千六十四年（後小松天皇應永十一年）なりき。かくて帖木兒は小亞細亞を併せたれば、更に東の方明を滅さむと欲し、大軍を擧げて征途に上る。明の成祖もまた大に備ふるところありしが、帖木兒は遂に途にして崩ぜり。實に「アンゴラ」の戰の翌年なりき。

「アンゴラ」の戰

宦者の禍

土木の變

四十二　明の中世

土木の變の寇　大禮の議　俺答

明の太祖は歴朝宦者の弊に鑑みるところありけむ、その政事に與るを許さゞりしが、成祖の惠帝に勝ちしは、宦者の内應によりしこと多かりければ、これより宦者の勢漸く盛んに、遂に政柄を掌握して權を恣にするに至りぬ。かくて英宗の時に至り、宦者王振帝の信任を得て事を用ゐ、國政大に亂れたり。

この時に當り瓦剌の部長に也先といふあり、明の弊に乘じて來り侵しぬ。王振乃ち帝に勸めて親征せしめしが、土木に至りて帝は敵の虜となれり。是に於て英宗の弟景帝立ち、屢、瓦剌の寇を退けしかば、也先も遂に和を請ひ、英宗を還したり。然るに景帝、英宗と隙あり、帝會、病にかゝり

内亂

大禮の議

俺答の寇

ければ、宦者曹吉祥等之を機として帝を廢し、英宗をして再祚せしめ、おのれその功を恃みて頗る專横なり。かくて吉祥は誅せられたれども、この後政權は多く宦者の手に歸し、武宗の時に至りて其弊殊に甚しく、百性聚歛に困み、世は群盜蜂起の時となり、反亂また尋て起りぬ。時に王守仁等の力によりて事漸く平ぐるを得たり。

武宗崩じて子なし。太后張氏諸大臣と議り、世宗を立てたり。張璁大禮の議を上り、帝の父興獻王及王妃に、帝と后との尊稱を上らむと請ひしより、學者互に其正否を論じたりしが、帝は璁の議を容れて、多くの反對者を刑し、皇考恭穆獻皇帝・章聖皇太后といへる尊稱を用ゐて、こゝに帝廟を建てたり。

是れより先瓦剌部は既に衰へたれども、韃靼部は勢を

回復し、卜赤可汗に至りて明の邊境に寇せしが、その從弟俺答勢盛んにして、頻に來侵し、掠奪を逞うせり。然るに世宗嚴嵩を寵信して、政綱弛廢し、能く之を防ぐを得ず、殆んどそのなす所に委したりしが、後俺答も吐蕃を征するに及んで、その入寇を止めたりき。

四十三　交趾の叛服　沿海の寇盜

交趾の沿革

大越

交趾は宋の初、丁氏交趾郡王に封ぜられしより、黎氏・李氏・陳氏相繼ぎてこの地に王たりしが、明の初陳氏衰へ內訌起り、成祖之を定むるに及んで、一たび明の有となりぬ。されど土民は明の政治を悅ばず、黎利といふもの兵を擧げて叛し、先づ明軍を破り、尋て陳氏の後を立てゝ國王となさむことを求めたり。是に於て宣宗その請求を許して陳氏の後を立てたりしが、やがて利は陳氏絕えぬとて簒立し、國號を大越と稱せり。

黎莫兩氏

かくて黎氏相嗣ぎ王位に登り、一たびは其勢も振へりしかど、後國政亂れ、權臣莫登庸は王位を奪ひき。是に於て王子黎寧遺臣を率ゐて登庸を伐ち、且つ狀を具して明の援を請へり。明の世宗之を許して軍を發す。登庸乃ち罪を謝し、藩臣たらむと請ふ。帝また之を許せり。これより交趾は二分して黎・莫兩氏相爭ひしが、後黎氏遂に勝ちて國內を統一せり。

沿海の寇盜

世宗の時、沿海の寇盜また猖厥を極めたりき。初我國亡命の徒、西海の邊民等と共に、高麗及元の沿海に出沒して掠奪を行へり。明人の所謂倭寇これなり。明の太祖因つて防倭衞所を置き、これが鎭定を計りたれど、その甲斐なか

りき。已にして成祖の時に至り、我が足利義滿の隣交を修むるあり。義滿も心を是に用ゐたれば、我國との通商も開けたりしが、後我が商民等彼に憤る所あり、復沿海を掠め、明人の志を得ざるものもこれに投じ、勢甚熾なりければ、世宗將士を遣して之を平げしめたり。されど其餘黨なほ臺灣を保ちて時に侵掠をなしたり。

高麗の末運

四十四　明の末世

萬曆朝鮮の役　東林の獄　流賊

明は年々倭寇に困みしが、穆宗を經て神宗に至り、我が豐臣秀吉の遠征軍と、朝鮮の地に交戰せり。高麗は元の藩臣となりし以來、常にその抑制を受け、國王の廢立すら一にその指揮によれりしが、已にして恭愍王の頃より元室いたく亂れしかば、高麗も今や彼れの羈絆を脱すべかりしに、會、武臣の跳梁甚しく、遂に恭讓王に至りて、李成桂といふもの、之に代りて王位に登り、明に請うて朝鮮の國號を得、以て其の封册を受けたり。朝鮮の太祖これなり。かくてこの後昭敬王昭の時に至り、政綱漸く弛み、武備また廢れ、こゝに秀吉の征伐を被りき。王是に於て援を明に請へり。明の神宗之れを諾し、兵を發せしが、軍敗れ遂に和を請じき。されどその書禮なく和議爲めに破れ、交戰歲を越えたり。會、秀吉薨じて彼我共に兵を解けり。この役は神宗の萬曆中なれば之を萬曆朝鮮の役といへり。

萬曆朝鮮の役

明の代は從來學者朝政の得失を議することと多かりしが、神宗以來黨派起りて、互にその權を爭へり。この頃顧憲成、事ありて官を罷められしより、鄉に歸り同志を東林書院に會して學を講じ、朝政を諷議し、時事を論難せり。尋て

東林の獄

流賊

李自成

鄒元標・趙南星もまたその徒を集めて之に應じ、當時志を得ざるもの來從すること少からず。是に於て廷臣等また黨を結び、之を排して東林黨と稱し、爾來互に軋轢したりしが、數十年にして熹宗の時に至り、非東林黨は遂に宦者魏忠賢と結托して、大に東林黨を斥け、疑獄を起して殺戮を恣にせり。後熹宗崩じて毅宗立つに及んで、忠賢等貶斥せられたれども、朝威已に衰頽し、また挽回すべき由なかりき。

明室の衰へたることかくの如きに當り、愛親覺羅氏滿州に起りて國邊を侵すを連りなり。而して國内また流賊蜂起せるあり、國步艱難愈甚し。而して當時流賊中李自成最著る。遂に西安に據りて國號を大順と稱し、進んで北京に逼りき。官軍防げども利あらず、毅宗帝終に自殺したり。

明の滅亡

明は十七世二百七十七年こゝに至りて亡びぬ。時に(我紀元二千三百四年後光明天皇正保元年)なりき。

四十五　莫臥兒帝國の興亡

「シバン」と「バーベル」

稀世の大材、帖木兒大王崩じてより、その帝國も分崩瓦解し、蒙古の裔なる日即別汗「シバン」、遂に中央亞細亞を領有せり。時に帖木兒王六世の孫に「バーベル」といへるあり、慨然祖業を興復せむと欲し、波斯王「シャ、イスメル」の援を得て、「シバン」に勝ち、一たび中央亞細亞を復せしが、民心服せず、「シバン」この機に乘じて起り、「バーベル」を破りてまた中央亞細亞を占領せり。かくて「バーベル」は意を中央亞細亞に得ざりしかば、今や志を轉じて印度を服せんとす。

印度は帖木兒王去つて後、國内騷擾を極めしが、「ロディ」と

「バーベル」の創業

いふもの阿富汗より入りて「ロディ」朝を建てたり。されどこの朝の勢もまた振はざりしかば、「バーベル」この弊に乘じて屢印度を侵し、遂に之を滅して自ら帝位に即き、こゝに莫臥兒帝國の基を創めたり。帝の崩後に「フマユン」立つに及び、内亂起り、身國外に逃れしが、波斯の援を得てまた印度を定めたり。次に立てるは子「アクバル」なり。帝性英敏治體に通ず。婚を從來在住の「ラヂヤプト」諸王と通じ、强ひて回教を奉ぜしむる積弊を矯正したるなど、大に民心を懷け、中北印度を一統して國威を伸長せり。國人稱して大帝と稱せり。實に莫臥兒帝國の建設者といひつべきなり。帝の治世は正に明の神宗と時を同うせり。

「アクバル」帝の治績

莫臥兒帝國の衰運

「アクバル」帝の後、再傳して曾孫「アウランゲゼブ」に至りては、南印度をも征服して、帝國最盛の時期に達したりしが、衰頽の兆もまた既にこの時に潛伏したりけむ、叛亂漸く起り、帝の崩後勢益〻熾んに、剩さへ波斯の來侵をうけたり。

波斯

波斯はさきに「フマユン」帝を授けて印度を平定せしめしかど、「アクバル」帝崩ぜし後、屢國邊を侵したりしが、阿富汗人「マームド」波斯に叛し、遂に入りて國王と稱しぬ。されどその後波斯人に「ナディル」といへるあり、阿富汗人を驅逐して王位に即き、勢に乘じて印度に向へり。時しも「アウランゲゼブ」の裔「モハメッド」莫臥兒國の帝位にありしが、國勢既に地に墜ち、軍敗れて和を請ひ、徒らに帝王の虛名を擁して、殘喘を保つに過ぎざりき。

四十六　葡萄牙西班牙の東略　天主教

の東流

蒙古一たび興りてより、歐亞の交通開け、陸路の通商貿易頗る盛んなりしかど、元亡びて明之に代るに及んで、歐人海路より來りて貿易するもの多くなりぬ。明の孝宗の時(我紀元二千百五十八年後土御門天皇明應七年)葡萄牙人「ヴァスコ、ダ、ガマ」、亞非利加の南端を廻りて印度の「カリカット」に達せしより、葡萄牙人の東航するもの多く、後十餘年にして「ゴア」を占領して之を根據地となし、漸次東方に進みて「マラッカ」、「シャワ」を略し、更に支那の沿海廣東・寧波(ニンポ)・厦門(アモイ)・阿瑪(アマ)港等に至り、隆んに貿易を營めり。彼等が我國に來りて貿易を開きしも實にこの交にありき。

葡萄牙人の東略

西班牙人の東略

是れより先「マゲルラン」といふもの、西班牙王の命をうけ、西航して南亞米利加より太平洋に出で、(我紀元二千百八十一年後柏原天皇大永元年)比律賓群島に達せしが、其後西班牙人この地を略し、「マニラ」を根據として、支那と貿易を營み、また我國にも來りて通商したりき。

天主教の東流

葡萄牙・西班牙の東略と共に、耶蘇教もまた漸く東洋に行はれたり。初唐の代に景教支那に傳たりしが、元に至りてはまた「フランシスコ」派の宣教師の來朝せるあり、耶蘇教多少流行したりけれど、明の初代に至りてはさして行はれざるに至りぬ。然るに「エズイット」派の宣教師「ザヴィエル」、「ゴア」に至るに及んで、印度は更なり、やがて我國にも傳來し、爾來この宗派盛んに行はれたり。天主教これなり。後神宗の時「マテオリシ」等來朝し、學藝を以て帝の寵信を博し、所々に教會堂を建て、頗る布教に力を盡しき。かくて宣教師相踵ぎて支那に入りしかば、その間耶蘇教の流入と共

に、天文曆算等の學術もまた傳來せり。

清の開國

四十七　清の開國　世祖の一統

我國明と兵を解きしより凡二十年、明はまた清の太祖と兵を交へき。清の太祖はその名を愛親覺羅（アイシンギロ）、奴兒哈赤（ヌルハチ）といふ。我が豐臣秀吉と殆んど時を同うして、滿州の長白山麓に崛起し、先づ滿州の諸部を平定せしが、葉赫（エホ）部のみ獨り降らざりければ、太祖自ら兵を率ゐて之を伐てり。明の神宗是に於て葉赫部の請ひに應じ、軍を發して之を援く、朝鮮の昭敬王の子光海君もまた兵を出して來會せり。然れども太祖は逆擊してこれらの諸軍を破り、葉赫部を滅し、更に瀋陽を下し、遼陽を陷れ、遂に都を瀋陽に定めき。これ卽ち奉天府なり。

世祖北京を取る

明の末路

世祖の一統

已にして太祖殂し、子太宗嗣ぎ、先づ朝鮮を伐つて之を降し、尋て西に向つて蒙古を征服し、國號を清と稱し、連に明の北邊を侵せり。かくて太宗につぎて子世祖立つに及び、明は毅宗方に位にあり、吳三桂を遣して清を防がしめしが、會、李自成京師を陷れ、毅宗自殺したりしかば、三桂清に降りその援を得て自成を破れり。是に於て世祖都を北京に遷し、明の北部を略するを得たり。

この時に當り明の遺臣史可法等、神宗の孫福王を南京に擁立し、以て清軍を禦ぎしが、その軍利あらず、可法等戰死し、南京陷落し、福王は遂に虜となりぬ。されど明の宗族なほ復興を計るもの少なからず、唐王は福州に帝位に卽き、魯王は紹興に據り、永寧王は撫州を保ち、桂王は肇慶にあり、何れも清に抗せしが、或は敗走し、或は殺されたり。こ

鄭成功

清朝極盛時代

の後桂王は緬甸に走り援を求め、魯王は厦門に逃れて鄭成功に依れぬ。成功父を鄭朱龍といふ。母は我國長崎の産なり。彼れは魯王を奉じて一たび江南の地を恢復し、軍稍振ひしが、遂に利あらずして退き、和蘭人を逐うて臺灣を取り、こゝに據りてなほ清に抗し、援を我國に求めたり。されど幕府はこれに應せず。幾ばくもなく魯王も成功も共に歿しき。さきに緬甸に奔りし桂王もこの年を以て虜となりて殺されたり。是に於て明の國祀全く絶えたり。時に（我紀元二千三百二十二年　後西院天皇　寛文二年）なりき。

四十八　清聖祖・高宗の業

鄭成功臺灣占領の年、世祖崩じ子聖祖立てり。聖祖より世宗を經て高宗に至る、凡そ百三十年間は、實に清朝極盛

吳三桂の亂

臺灣全く清の有となる

の時代にして、稜威大に内外に振へりき。聖祖の時は明の遺族も平ぎたれば、國中安泰となりしが、藩籍奉還のことより、當時最勢力ある吳三桂先づ反し、耿精忠・尚之信も尋て之に應しぬ。是に於て清朝の政令を悅ばぬ漢種の來歸するもの頗る多く、成功の子鄭經もまた臺灣より出兵せり。然れども清廷諸將を遣して之を討たしむるに及び、精忠・之信相つぎて降りしかば、賊軍大に阻み、幾くもなく三桂死し、江南の地遂に平定せり。かくて鄭經も死しその子克塽出降るに及び、臺灣また全く清の有となりぬ。

是より先欽察汗國は衰頽せること甚しく、露西亞は此の機に乘じて勃興し、遂に「ウラル」山西の地を併呑して根據となし、更に意を東方經略に專らにし、漸次西比利亞を服して、黑龍江の邊に達し、清の世祖の南略に忙はしきに

乘じて滿州を侵したり。是に至りて聖祖叛亂を定め、臺灣を降すに及び北邊を警戒して露兵を擊ち、遂に兩國の使節を「ネルチンスク」に會して境界を議し、外興安嶺以南を以て清の版圖と定めたり。(時に我紀元二千三百四十九年東山天皇元祿二年)これを「チルチンスク」の條約といへり。

「ネルチンスク」の條約

聖祖の英邁なる、次に阿爾泰山以東を征略せり。初瓦剌部分裂の餘、その準噶爾部に噶爾丹出て、既に天山南路・西藏及青海を服せしが、更に東して外蒙古なる喀爾喀部を攻む。喀爾喀部の諸汗よりて援を清に求めたり。聖祖乃ち噶爾丹に命じて、その侵地を返さしめむとせしに、彼れ聽かざりければ、こゝに親征して之を破り、遂に彼をして自殺するに至らしめき。是に於て阿爾泰山東內外蒙古の地清に歸服せり(我紀元二千三百五十七年元祿十年)

阿爾泰山東の服屬

噶爾丹の敗亡

噶爾丹の敗るゝや、その族策妄阿拉布坦聖祖に應じたるを以て、準噶爾部を領せしが、勢に乘じて更に西藏を侵しゝかば、聖祖また之を擊退して西藏を定めたり。

西藏平定

聖祖の崩後世宗を經て高宗立てり。時に準噶爾に內亂あり、帝策妄阿拉布坦の外孫阿睦爾撒納の言を納れて、その地を平げしが、後阿睦爾撒納は天山南路と通じてこゝに叛旗を擧げたりければ、帝兵を發して之を殺し、先づ天山北路を服し、尋て天山南路をも征定せり。是に至りて西方の經略全く成りぬ。時に(我紀元二千四百二十年桃園天皇寶曆十年)なり

天山南北路の征定

雲南貴州の歸服

雲南貴州の地は苗族の占居せるあり、清室の威未だ及ばざりしかば、世宗の時之を征討したりしかど、爾來なほ不穩なりければ、高宗また之を打ち、悉くその地を鎭定せ

り。

四十九　清人の學術

元明兩朝の儒學は宋の遺風をうけて、專ら性理に耽り、明の時薛瑄は程朱の學を繼承し、王守仁は陸子の說を祖述し、何れも盛んに行はれたりしが、末葉に至りてはその反動として、顧炎武等考證學を興しぬ。かくて清の聖祖・高宗の時に及びては、外に向つて大に國威を伸長したるのみならず、內に對しては盛んに學術を奬勵し、頗る文德を發揚したり。名に負へる康熙字典を初、佩文韻府・淵鑑類函等皆當時の勅撰になりしもの、實に千古の寶典にして、學術界に資するところ極めて多く、閻若璩・毛奇齡等出でゝ考證の學益、精に入りぬ。考證學の進步かくの如しといへ

孝證學

ども、宋學もまた全く廢れたるにあらず、官吏の考課には

其他の學

なほ之を用ゐたり。

高宗帝の如きは、勅を下して諸書を撰ばしめたるのみならず、親ら筆とりてものせるもあり、所謂御批通鑑輯覽是れなり。當時趙翼・王鳴盛等史學を以て著れ、侯方域・王士禎等詩文を以て聞え、李漁・蔣士銓等また小說戲曲を以て名を博せり。

五十　東洋に於ける和蘭・英・佛諸國の競爭

葡萄牙と西班牙とは東洋貿易の先驅にして、來航以來大凡百餘年間、能く商權を維持し、殆んとその利を獨占したりしが、從來西班牙の屬國たりし和蘭が、遂にその羈絆を脫してより、また奮て東洋貿易に從事し、我が慶長の初

和蘭

蘭英の競爭

年(明の神宗の萬曆中)東印度商社を設立し、力を印度の通商に盡し、漸く葡萄牙・西班牙を壓して、錫蘭・「マラッカ」等を奪ひ、更に「ヂャワ」の「バタビア」を占領して根據となし、後また東して臺灣を占領し、我國及び支那と通商したりき。初葡萄牙・西班牙の二國は、通商貿易と共に、天主敎の傳導を努めしかば、東洋諸國多く之を厭ひ、その貿易上に影響せるところ少なからざりき。然るに和蘭は巧にこの機を察したればにや、專ら貿易にのみ留意して、毫も布敎のことを顧慮せざりしかば、次第に葡萄牙人等を壓倒することを得たりしなり。是に於て東洋の商權一時全く和蘭人の手に歸しぬ。

この時に當り、英國もまた來りて東洋貿易に從事したりければ、こゝに蘭・英兩國の競爭起りぬ。初英國は稍和蘭に先たちて東印度商會を建てたりしが、蘭人は他を壓して我國及支那との貿易を獨占し、英人を東印度群島より驅逐せり。されど英國は專ら力を印度貿易にのみ盡しこゝにその商權を掌握することを得たり。

英佛の競爭

當時佛國もまた東洋貿易に從事したりしが、今や英國は「マドラス」「カルカッタ」を領して勢力あり、佛人「ヂュプレー」も「ポンヂッチェリー」の總督として侵略策を定め、佛國の威方に南部印度に盛なり。さなきだに英佛の兩本國既に隙を構へたりければ、こゝに至りて印度に於ける兩國人の嫉視競爭せる、は自然の勢となりぬ。時しも莫臥兒帝國は崩解の運に壓り、諸王の間內亂屢起りしかば、兩國は之に干涉して遂に戰端をひらけり。かくて英國は遂に勝利を得、殊に「グライヴ」の力により「ベンガル」地方の實權を握る

に至りき。時正に清の高宗の代に當れり。

五十一　英領印度

印度大總督

「クライヴ」につぎて印度の總督たりしは「ウォーレン、ヘスチング」なり。「ヘスチング」は「ベンガル」を擧げて全く英國の領土となし、「オード」國をその保護國となし、莫臥兒帝に年金を與へてその帝室を輔くるなど、頗る英國の勢力を增進し、印度大總督として大に內政を改良せり。この後「ウェルズリー」及び「マークェース、オフ、ヘスチング」相つぎて大總督となり、英國の威益熾んなり。

英國と阿富汗斯坦との關係

この時に當り露國は漸く中央亞細亞を經略し、次第に南進せむとす。英國いたく之を憂ふ。會、阿富汗斯坦に內亂起りしかば、時の印度大總督「オークランド」、この機に乘じて廢王を擁立し、國人の歡心を得以て露の南進を阻遏せむとせしが、事遂に齟齬したりき。是に於て「オークランド」本國に召還され、「エレンバラー」之に代りぬ。英國が北部印度を征定してその領土となしたるはこの時にありとす。

かくて「ダルフーシー」大總督となるに及び、內に積年の陋習を改め、頗る文化を進め、外は緬甸を伐ちてその地を割かしめたるなど、功績いと多かりき。されど內治の改良急激に過ぎたりければ、(我紀元二千五百十七年孝明天皇安政四年)土兵の大叛亂起りぬ。この時「カンニング」方に大總督の職にあり。二年餘にして之を平定せり。然るに莫臥兒帝は叛徒に與したるを以て廢せられ、莫臥兒朝全く亡びぬ。かくて英國は東印度商會の政權を收めてその直轄となし、我紀元二千五百三十七年(明治十年)英國女皇は印度皇帝の

莫臥兒朝の滅亡

印度皇帝

稱號を兼ねたり。

五十二　清英の交渉

英國の威力全印度を席卷するに當り、東印度商會は英國政府の特權を得て、清國との貿易に從事し、盛んに鴉片を輸入せり。是に於て清人その烟毒を受くるもの極めて多かりければ、高宗・仁宗の間之を燒棄したりしかど、流弊の甚しきなか〳〵に禁ずべくもあらず。宣宗の時に至りてその輸入益多かりき。時に林則徐いたく之を慨き、兩廣の總督となるに及んで、廣東の英國商人に嚴命して、悉く所藏の鴉片を出さしめ、之を燒盡してその通商を禁じたり。是を以て英人大に怒り、その通商權を復せむとて、軍艦十餘艘を率ゐて舟山・乍浦を陷れ、寧波に逼り、別軍は渤海

鴉片

林則徐

戰爭

より入りて和を促せり。清廷廣東に於て爲に和を議したれども成らず、香港・厦門・定海・鎭海相踵ぎて陷り、英軍は上海・吳淞を取りて將に南京に入らむとす。事こゝに至りしかば、清廷もさすがに和を請ひ、伊里布と者英とを欽差大臣となし、英國全權公使「ポッチンヂャー」と南京に會せしめ、償金二千百万兩を出し、廣東・福州・寧波・厦門・上海の五港を開き、更に香港を英國の管轄と定めて和議を約しき。時に（我紀元二千五百二年仁孝天皇天保十三年）なり。

和議

五十三　長髮賊の亂　英佛の北清侵伐

清國極盛の時代は既に去り、內亂屢起りて漸く衰頽の運に向へり。剩さへ鴉片戰爭以來民多く清廷を輕せり。この時に當り洪秀全といふものあり。名を耶蘇敎に托し、兵

長髮賊起る

を廣西に擧げ、自ら王號を稱して江南を攻掠し、連に官軍を破り、南京を取りて之れに據りぬ。その徒皆髮を蓄へしなば、之を長髮賊と呼べり。時に宣宗崩じて文宗位にあり、曾國藩等義兵を起して王事に勸めたれど、賊軍なほ猖獗なり。

英佛同盟軍

この內亂に際し清國はまた難を英佛に結びき。始め廣東の府吏清人十二名を英國國旗を建てたる商船中に捕へしが、英國領事其還付を求めて得ず、遂に兵力に訴へたり。清廷恐れて和を結べり。已にして英國の使臣その條約の批準を交換せんとて、北京に向ひしに、白河にて清兵に砲擊せられたり。この時佛國の使臣もまたこの難にかゝりしかば、兩國の同盟軍はやがて太沽・天津を陷れ、進んで北京に入りぬ。是に於て文宗難を熱河に避け、恭親王をして和を請はしむ。露國公使またゝ斡旋するところあり、清國は償金一千八百萬兩を出し、牛莊・登州・臺灣・潮州・瓊州・九江・漢口を開きて局を結べり時に(我紀元二千五百二十年孝明天皇萬延元年)なり。

長髮賊の平定

この間李鴻章・左宗棠・曾國筌等もまた兵を擧げて長髮賊を破りしかど、賊未だ平定せず、穆宗立つに及んで米人「ワルト」、英人「ゴルドン」等、洋槍隊を率ゐて賊を破り、以て官軍と力を合せしかば、秀全も遂に自殺し叛亂全く定まりぬ。時に(我紀元二千五百二十四年孝明天皇元治元年)この亂の起りしより正に十五年を費せり。

五十四　露人の東略　清露の關係

東方に於ける清露の境界は、「チルナンスク」の條約によ

「キャクタ」條約

露國烏蘇里河東を得

「アイグン」條約

樺太全島を占領す

りて已に定まりたれど、露國の東方經略は益、その度を高め來り、世宗の時に至りては「キャクタ」條約を結びて大に通商の權を得、而して一方に東塞加を略して我北邊を窺へり。かくて清室の威望漸く傾くに及び、露人は黑龍江畔に入り、その河口を占領して「ニコライスク」と名つけ、こゝに東方侵略の根據地を建て、清廷が長髮賊の亂に困弊せるに乘じ、之れに迫りて「アイグン」條約を定め、以て黑龍江北を併せたり。已にして英佛の同盟軍北京に入り、清廷大に窘めるに際し、その間に立ちて斡旋盡力したりとて烏蘇里江東の地を割かしめ、浦鹽斯德を建てけり。是に於て露國は始めて朝鮮と境を接するに至りしが、從來我が北邊を窺ひし結果、尋で彼れに樺太全島を得せしめ、我は千島群島を取りたりき。時に我紀元二千五百三十五年(明治

中央亞細亞侵略

八年)なり。

露國はかく東方亞細亞の侵略を計り、我が國・朝鮮及支那に接近したるのみならず、また中央亞細亞の蠶食を怠らず、「キヤ」「ブハラ」「コーカンド」の爭亂に乘じて、土耳其斯坦の地を略しき。已にして長髮賊の亂後回教徒の亂を作すに及び、また之を機として遂に伊犂を占領せり。清廷左宗棠を遣して叛亂を鎭定したる後、伊犂の還付を求めしに、露國之を肯せず、戰端將に破れむと見えたりしが、兩國遂に平和條約を締結し、露國は「ボルゴス」河西の地と償金九百萬「ルーブル」とを得て局を結べり。時に我が紀元二千五百四十一年(明治十四年)なり。

この後我が國清國と交戰して之に勝ち、遼東半島を割かしむるに至りしが、露國は獨・佛二國と同盟し我國に勸

西比利亞鐵道及び旅順大連灣の借地權

めて之を還付せしめ、後獨國の膠州灣占領に乘じて、旅順及大連灣の借地權を得、且つ西比利亞鐵道線を遼東に布設するの權を得るなど、着々歩武を進めて東略を怠らず。

五十五　安南　暹羅

大越と廣南

安南はもと交趾の地なり。前章已に述べたる如く黎氏一たび國内を一統したりしが、その功臣阮鄭の兩氏相和せず、阮氏は南に廣南國を建て、鄭氏は北になほ大越の國號を稱しき。かくて清の高宗の時に至り、阮文惠兄弟亂を作して兩國を滅し、黎氏の裔維祈を逐ひたり。是に於て維祈援を清に請ひしかば、高宗は兩廣の總督孫士毅をして阮文惠を討たしめ、後その降を許しき。

阮文惠の安南を略するや、黎氏の功臣たりし阮氏の裔に、阮福映といへるあり、暹羅に逃れてその援を求め、また佛人の助力を得て、遂に安南に王となり、國を越南と號して世々清廷の封册を受けたり。

越南

暹羅

暹羅は建國以來勢威概振はず、我が山田長政が國王を輔けて爲したるが如きことなきにあらねど、常によく緬甸に苦しめられしが、清の高宗緬甸を征せるを機とし、回復を計り、また清廷の封册を得たり。

越南と佛國との關係

越南一たび暹羅の援を得たりといへども、後遂に兵を交へて敗を取り、剩さへ難を佛國に構へて地を割くのやむを得ざるに至りぬ。蓋し越南王は耶蘇教を喜ばざりけむ、佛人に對してさきに助力を得たるに酬えざるのみならず、約束をだに履行せざりしかば、佛國は之を責めて兵力に訴へ「サイゴン」を取れり。是に於て越南は南方の地を

割讓し、償金を納れて和を約しき。時に(我紀元二千五百二十二年孝明天皇文久二年)なり。

かくて佛國はこゝに根據地を得たれば、やがて柬埔塞を保護國となし、益、爲すところあらむとす。然るに越南はこかく佛人を忌み屢、之を殺害せしかば、佛國之を怒りまた兩國の間に開戰を見るに至りぬ。時しも長髮賊の殘將に劉永福といへるあり。越南王を助けその黑旗軍を率ゐて能く佛軍を防ぎたれど、越南王は遂に和を佛國に約し、東京地方を割き、かつその保護國となりたり。時に我が紀元二千五百四十三年(明治十六年)なり。

越南、佛の保護國となる

五十六　清佛の交渉

越南が東京地方を割きて佛國の保護國となるや、清國之を悅はず、そが從來清國封册を受けたるの故を以て、佛國に詰るところありしかど、竟に安南の主權を拋つに至りぬ。是に於て佛軍は諒山を占領せむとせしに、尙この地に屯せる清軍に襲擊せられたり。佛國之を怒り償金を要求す。而して清國また之を拒絕せり。

清佛、安南に衝突す

かくて佛將「クールベー」等海軍を率ゐて福州を攻め、清の艦隊を殲し、退きて澎湖島を占領し、陸軍もまた勝を得て廣西を侵し、諒山に據りぬ。已にして「クールベー」は軍中に死し、清將馮子材等諒山を陷れしが、佛國內閣も交迭して外交政策一變せしかば、兩國の使臣、天津に會して平和條約を結び、清國はさきの如く安南の主權を拋ち、佛國は償金を撤回したり。時に我紀元二千五百四十五年(明治十八年)なり。

清佛戰爭及び講和

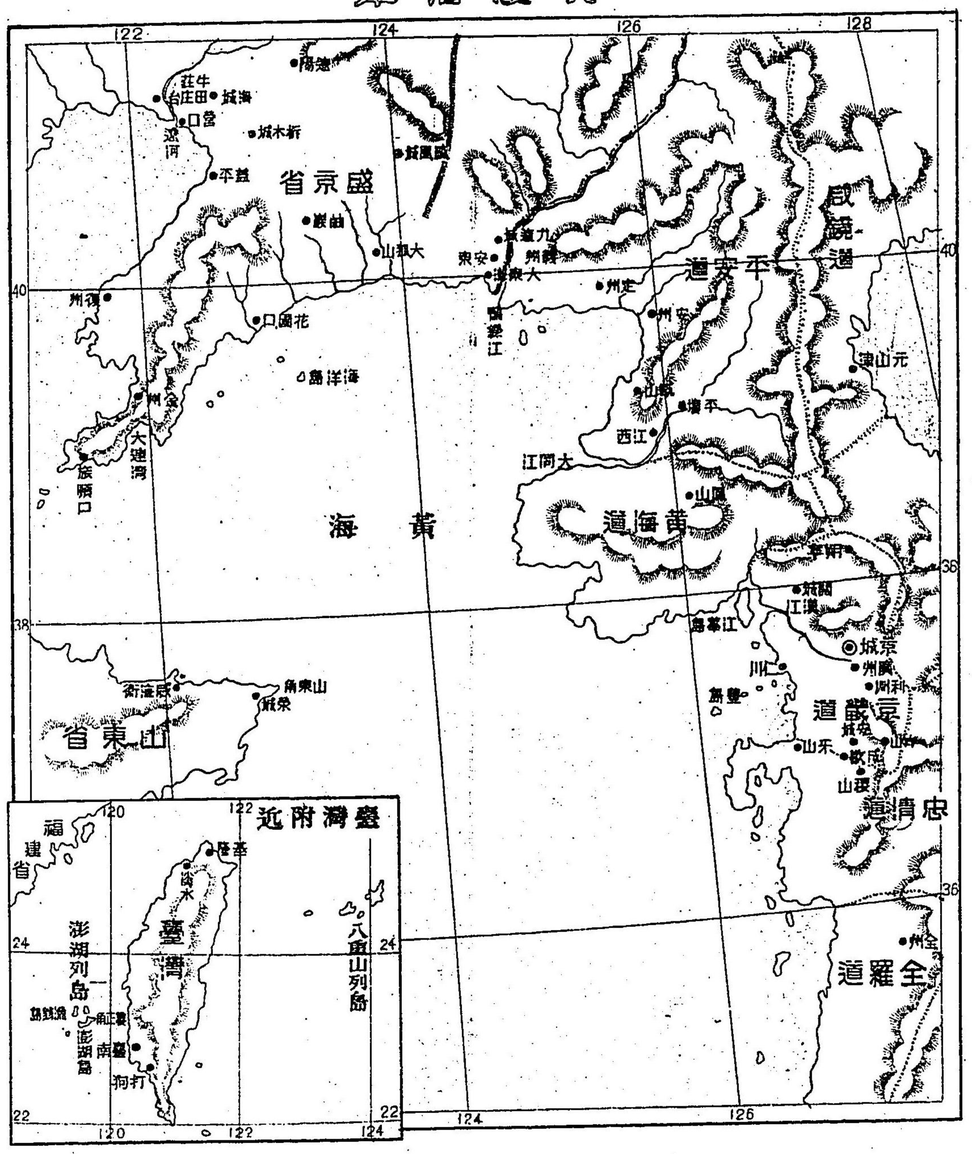
朝鮮

大院君

五十七　清韓の關係　日清の交戰

朝鮮は清の太宗以來、その封冊を受け、我德川幕府との間互に交聘したりしが、李熙國王となるに及び、その實父大院君李是應攝政して鎖國主義を取り、遂に佛米兩國と紛爭起りぬ。時に兩國は之を清國に責めしに、清は朝鮮の獨立にして、その外交は清廷の關する所にあらずと答へき。かくて朝鮮が我交通勸誘に應ぜず、剩さへ我れに暴行を加へたるを責むるに及び、我は彼と通商條約を結びて、更にその獨立を確認し、尋で英・佛・獨・露の諸國をして我れに倣ひてその條約を結ぶに至らしめたり。

已にして、朝鮮王政を親裁するに至り、大院君は隱退し、王妃閔氏の族專ら政柄を握れり。是に於て大院君閔族の



大院君閔氏を除き我が公使館を燒く

朝鮮に於ける日清の權衡

勢を忌みて之を除き、また我が公使館を燒けり。我朝乃ちその罪を問ひ、償金を納れしめ、この後駐在兵を遣りて公使館を護衛せしむることを約しき。時に我が紀元二千五百四十二年(明治十五年)なり。これより清國も我が國と權衡を保たんとて、また同じく駐在兵を置きたり。

是より先、我が國人臺灣の土蕃に殺害せられしことあり、我が朝は之を清廷に詰りしに、初は之に應せざりしが、後その言を食みしかば、遂に償金を我れに納れたりき。かく日清兩國の感情既に背馳したりしを、今また各韓地に兵を駐めて相對するに至りぬ。さなきだに朝鮮の地勢日清兩國の間に介在せるを以て、廷臣分れて二黨となり、我國に倚りて獨立を保たんとせるを獨立黨といひ、清國に屬して之に事へんとせるを事大黨といへり。已にして我

朝鮮の二黨

天津條約

朝鮮東學黨の亂

紀元二千五百四十四年(明治十七年)、獨立黨の金玉均等、事大黨の閔泳翊等を除き、國王を擁して我が駐在兵の守護を請へり。時に清の駐在兵は事大黨を援け、我が公使館を燒き、居留民を殺掠せしかば、我朝先づ朝鮮をして罪を謝せしめ、尋で伊藤博文を全權大使として清國に遣し、兩國兵を撤し、將來出兵を要せば先づ知照せむことを約しき。天津條約卽ちこれなり。

然るに我が紀元二千五百五十四年(明治二十七年)に至り、朝鮮に東學黨の亂あり。我國は清國と協議して、朝鮮の內政を改善せむとせしが、彼れは朝鮮は屬邦なればとて、恣に兵を牙山に出して我が議を拒みき。是に於て我朝もまた彼れの約に背けるを怒りて兵を發し、こゝに兩國の開戰ことはなりぬかくて。我が軍連戰勝たざることなかりければ、清國は終に李鴻章を全權大臣となし來りて和を請はしめ、清國は朝鮮の獨立を承認し、遼東半島及び臺灣諸島を割讓し、償金二億兩を納れ、また別に四港を開くことを約して、和議成りぬ。實に翌二千五百五十五年(明治二十八年)四月にして、馬關條約是れなり。この時に當り露佛獨三國は相同盟して、我が遼東を永久に領するは、東洋平和に害あらむことを忠告せしかば、我が國は之れを納れその代償として三千萬兩を收めたりき。

日清の交戰

馬關條約

新編東洋小史 終

東洋小史
正價金七拾錢

明治三十三年三月廿日印刷
明治三十三年四月一日發行

著作者　東京市神田區鍛冶町四番地　高橋健自
發行者　東京市京橋區築地三丁目十五番地　伊藤岩治郎
印刷者　東京市京橋區築地二丁目十七番地　野村宗十郎
印刷所　東京築地活版製造所
發行所　東京市神田區今川橋通鍛冶町　誠之堂書店（電話本局九百四十九番）
發賣所　奈良縣奈良市字角振　辻本朔次郎

誠之堂藏
不許複製

山崎鐵編
新定用器畫法 全三冊
（卷之一 幾何畫法 金廿二錢；卷之二 投影畫法 金二十錢；卷之三 透視畫法 金二十錢）

◉解說 鹽谷榮編（中學校・高等小學校教科用書 文部省檢定濟）
全三冊 正價各冊金拾八錢

新案英語讀本 全三冊
中學校用（第一部 卷一 金廿錢；第二部 卷二 金十八錢）正價 金三十錢
小學校用（金十五錢；金十三錢；金廿五錢）

深井鑑一郎輯註
標註史記列傳 全五冊 正價各冊金廿五錢

堀捨次郎・深井鑑一郎校註
標註東萊博議 全三冊 正價各冊金三十錢

河村定靜校定
白文文章軌範 正續二冊 正價金三十錢

金井至莊編
新定中等作文軌範（一名作文法示要） 全一冊 總クロース 正價金五十錢

山田準・深井鑑一郎標註
教科適用標註文章軌範 正續二冊 正價金卅五錢

以上は何れも師範學校、尋常中學、商農業學校、高等女學校及高等小學校其他の教科用書幷に參考書として各所に採用せらるゝものなり

山田準校註
教科適用標註小學 和本內篇、外篇 全二冊 正價各金十八錢

深井鑑一郎・山田準校註
教科適用標註論語 和本全一冊 正價金十八錢

深井鑑一郎・山田準校註
教科適用標註孟子 和本全一冊 正價金二十七錢

深井鑑一郎・山田準校註
標註四書 洋紙摺合本全 正價金二十七錢

生田目經徳編
新定女子國文讀本 和本全八冊 正價金 從一至四各金廿二錢 從五至八各金廿五錢

服部乙三郎・松平靜編
高等小學女子日用文範 和本生徒用 一金十二錢 二金十三錢 教師用合本金廿二錢

原滋吉著
摘要算術（各科中學二ヶ月生參考用） 全一冊 正價金四十錢

原滋吉著
摘要代數 全一冊 正價金三十錢

白井義督著
速成幾何學 全一冊 賣價金三十錢

86
158

003261−000−8

86−158

新編東洋小史

高橋　健自／編

M33

ACC−1557